

ガンゲイル・オンライン 戦場に散るロマン

Bishop1911

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2026年の冬。

離島暮らしの高校生1年生の藤原 昌平と

相棒兼親友の明日葉 灯俊、

その幼馴染の霧島 葵は

銃と鋼鉄が支配する世界をロマンで戦い抜く。

そんな3人を待ち受ける仮想世界の名は

ローガンゲイル・オンライン

この作品は毒蛙さんの

「相談役毒蛙の日常」から1年後で、

アリシゼーション以降の話です。

感想、指摘メールお待ちしております。

オブラートに包んでお送りください。

15	14	13	12	11	10	9	非日常の中の日常	8	7	6.5	6	5.5	Another f a c e	4.5	4	3.5	3	2.5	2	1	Welcome t o G G O	プロローグ
115	109	103	99	95	89	84		79	71	66	57	51		44	39	32	28	24	16	7		1

目次

プロローグ

タタタタツ　タタタタタタタタツ

SBCグロツケンにほど近い荒野で、

地球開拓軍と名乗って

ロールプレイを楽しむ近未来的なアーマーに

身を包んだSFチックな6人組のスコードロンが

激しく銃声を鳴り響かせていた。

PvEをメインにする彼らは普段から

狩りの帰りに襲撃される事を想定して

実弾銃をストレージの片隅に収納しており、

実弾銃の銃声からおそらく彼らが

恐れていたPvPであることは間違いないのだが、

地球開拓軍の面々は

それ以上の恐怖を相手にしていた。

「どこだ、ラインが見えなー」

「隊長！ジョセフが！」

「黙れ！…いいか、相手は1人だ。」

そう、たった1人の相手に

追い詰められているのだ。

いくらPvE専門のスコードロンでもそれなりに

PvPの経験を積んでいただけに、

この戦況は彼ら地球開拓軍の士気に大きく影響した。

「でも…ラインが…」

それもそのはず。

相手は数年前のスクワッド・ジャムから

使われ始めた上級者中の上級者技、

つまり彼らからしてみれば雲の上のプレイヤーが

使うリアルなスキルを駆使したライン無し狙撃を

使ったスナイパーだったのだ。

加えてその連射速度からしてセミオートライフル。

ボルトアクションライフルに少し劣る程度の
高精度な弾丸が次から次へと送られて来るため、
ボルトアクションの再装填の際を狙った
陣地展開すらまともにできない。

「いつまでも隠れてんじゃねーぞッ!!」

地球開拓軍の兵士の1人がスナイパーの
潜んでいるであろう方向へと銃弾をばら撒き、
次の瞬間にはその場に崩れ落ちた。

「チッ、PVPで電磁スタン弾

使うって一体何もなーうぎやアツ!」

男は最後まで言い終わらないうちに

悲鳴を上げて仲間と同じように倒れた。

するとさつきまで何も無かった空間が歪み、
まるでブラックホールのような黒いシミが
できたかと思うとそれは一気に広がり、

黒いマントに身を包んだ人の形を作り出す。

まるで幽霊のように現れた黒いマントの男は

ホルスターからCz75を抜き、

倒れているSF兵士たちに近づくと

その首筋に1発ずつ撃ち込んでいく。

当然9mm口径のCz75ではそれなりに

ステータスの高いSF兵士たちにトドメを

させるわけがないのだが、

よく見ればSF兵士たちが唯一肌を露出させている

首から頭の部分に1人1つずつ不気味な緑色の液体が

充填された小さく透明な虫のような物がくっついている。

マントの男はCz75のマガジンを交換して

SF兵士たちの腕を掴むと、

設定を変えなければ本人にしか見えないはずの

メニュー画面を出現させ、

迷いのない操作でストレージから

全てのアイテムを実体化させた。

「クソッ、何しやがるーやめろー」

「おい待てッー」

男たちの制止を無視して

マントの男は全員のアイテムを全て奪い取ると、

最後に仕留めたりーダーのSF兵士のもとへ

ゆつくりと、しかししつかりと

地面を踏みしめながら歩み寄り、

首根っこを掴んで横っ面を覗き込む。

「…ゲーム、オーバーだ。」

「は？お前何言ッー」

SF兵士は質問を最後まで言い終わる事なく、

いつのまにか9mmの実弾に再装填されていた

Cz75で頭を撃ち抜かれ、

ポリゴンのカケラとなって荒野に散った。

数分後。

マントの男に全てを剥ぎ取られて

文字通り裸一貫となった元SF兵士たちは

SBCグロツケンの酒場にあるクエスト依頼用の

掲示板へ黒いマントの男に関する

最初の依頼を書き込んだ。

〈討伐依頼〉

依頼主：地球開拓軍

報酬：300クレジット

プレイヤー名：

プレイヤーID：

特徴：黒マント、ライン無し狙撃、

電磁スタン弾使用

備考：電磁スタン弾を使つて

装備を全て剥ぎ取られます。

2026年も終わりが見えてきた

12月のとある日曜日の朝。

夜遅くまでガタゴトと騒がしい隣人であり幼馴染の

おかげさまで寝不足気味の灯俊は

台風通過後と言われても

何ら不思議のない寝癖のついた髪の毛を

押さえつけながら洗面所で顔を洗い、

歯を磨いて台所に入った。

「やつと起きたかトー坊。」

「おはよ…アルゴ…」

朝から元気だね…何か良いことあった？」

「まあナ。」

良い知らせと悪い知らせだ。」

灯俊は頭からまだ抜けない眠気を振り払おうと
テーブルの上のコップの水を一気に飲み干す。

「ナっ……」

「ん？あー、えつと……じゃあ悪い方から。」

「……そのファイルの中だ。」

アルゴがちょうど出来上がったらしい味噌汁を

お椀に注ぎながら目線で示したクリアファイルから

何枚かのプリントを取り出したトードは

それがインターネット上の掲示板での

やりとりを印刷した物だと理解するが、

内容がサツパリ理解できない。

『アンブッシュ』だとか『ライン無し狙撃』

その他大量の業界用語らしきものの羅列だらけだが、

かろうじて理解できたのは

記憶の底に沈めていた3文字だった。

……GGG

「……アルゴ、分かって言ってるのか？」

「ああ、承知の上サ。」

だから前回の教訓を活かして今回は準備からだ。」

それから数分かけて資料に黙々と目を通した灯俊は
クリアファイルをアルゴに突き返した。

「……檉舟さん、この話を葵には？」

「してませんよ。」

「……少し……時間を下さい。」

「分かりました。」

トードはその返事だけを聞いて部屋に戻った。

それからきっかり1時間後。

日曜日で部活が休みになったのを良いことに

二度寝をかました葵は午前8時になって

ようやく床を出た。

リビングへ向かうや否やいつものように

アルゴの中の人である檜舟素子に叱られる。

「やつと起きたカ。」

カトラスも少しはトードを見習えヨ。」

「はあ〜い…」

あくびとも返事ともつかない声を発した葵は

午前4時に一度起きた時に使ったコップへ

手を伸ばし、注ぎっぱなしにしていたはずの水を求めて

コップを傾けるが…コップの中は空っぽである。

「ぶっ…くくくく…」

「…あれ？」

檜舟せんせい、水飲みました？」

「ナ、ナンノコトダロナー…」

何が起きているか1人だけ理解しているアルゴは

笑いを堪えながらこのネタをどうしたものかと

思考を巡らせ始めた。

W e l c o m e t o G G O

1

ここの発端は2026年の冬だった。

「なあシヨウ、今日部活あるか?」

「一体どこのバカが終業式に

部活やるんだよ…て言いたかったけどな…

今日も練習やるらしい。」

俺は藤原 昌平（ふじわら しょうへい）。

壱津島高校の1年生で、

今は部と呼ぶことを躊躇うほど

何もして無さそうなオカルト部の親友、

明日葉 灯俊（あすは ひとし）と放課後の

部活前の時間を使って他愛もない話をしていた。

「んで、その切り出し方ってことは

何かあるんだな?」

「ん、ああ、まあな。」

無計画ゆえに終業式にこうして

持ち帰ることになった国語教材という

名の鈍器たちを押し込む俺の傍らで

灯俊は話を切り出した。

「アミクスファイアってあるじゃん?」

あれのGGOをやりうと思うんだけど

シヨウも一緒に遊ばないかなと思っただけね。

もし買うならお金は足りるか?」

「結構貯金してたし去年のお年玉が

5000円残ってるから3万くらいはあるぞ。

それにしても珍しいな、

お前が戦争ゲームに興味持つなんて。」

「そんなことないけどな。」

そんなことがあったのだ。

いや、現在進行形であるのだ。

こいつが興味を持つのは某機動戦士や
名前は忘れたが戦闘機に変形する

ロボットのアニメだ。そして猫耳娘を見て

『かわいいは唯一絶対の正義だ』とかなんとか

逝ってるやゲブンゲブン：失礼、言ってるやつだ。

どうして何も企んでいないことが

あるだろうか、いやある。

「何か企んでるだろ？」

「な、ナンノコトカナ。」

「言わないと○ツにガスガン突っ込んで
バンバンするぞ。」

周囲の女性陣からの冷たい視線は

日常茶飯事だから気にしない。

いや、もう気にならない。

「わあかったわかった言うから。

…あのな、光学銃ってカッコよくね？」

「意見の相違だな。俺は実弾銃が好きだ。」

「ああ、そっちもあるぞ。」

実弾銃があるならば決定だ。

俺はどんな銃を使うかを妄想しつつも

返答は忘れない。

「よし、買おう。」

人生を楽しみたいなら己の欲望とロマンには

逆らうべきではない。

「ウチは親の了解済みだけだし、

シヨウのところはだいじよぶなのか？」

「ああ、大丈夫。」

俺の親父、結構新しい物好きだし、

アミユスフィア買おうとか言ってたから。」

「じゃあショウ、明日…部活は？」

「午前中だけ。」

「なら13時、豊町のゲームショップに集合な。」

「よしわかった。じゃあまた明日。」

翌日

週末はやる気のないキャプテンのおかげで

練習は予定の30分前に終わったため、

俺はバスの時間が近くことを理由に

武道場を飛び出し、

学校発のバスにそのまま飛び乗った。

学校と俺の家がある巖田町から

ゲームショップのある豊町までバスで揺られ、

バスが停車すると同時に

小遣いと長年の貯金が詰め込まれて

パンパンになった財布から取り出した小銭を

賽銭箱のような運賃箱に

ジャラジャラと滑り込ませ、バスを降りた。

「クツソ、ボツタクリかよ。」

隣町に行くだけで

500円越えとかあんまりだろ…。」

誰も聞くことのない愚痴を

雪すら降らない殺風景なクリスマスイブの空に

ぼやくと、

「お、早かったなショウ。」

背後からお馴染みの声をかけられる。

「いつものことだよ。」

キャプテンが寒いからって早めに終わった。」

「そか、たしかにあの武道場で素足は

耐えられないな…。とりあえず行こうぜ。」

俺は灯俊と合流すると、

ゲームショップの前に置かれている屋台で

サンドウィッチやらホットドッグやらで

空腹を満たし、アミユスファイアとGGOを求めて

店の中に入った。

入店して早々にクレインゲームの景品や、

普通の商品として

陳列されている某機動戦士プラモに

釣られそうになる灯俊を引っ張って店員を訪ね、

ショーケースを開けてもらい、

灯俊と違ってアミユスファイアすら

持っていない俺はアミユスファイアとGGOを。

灯俊はGGOとちやっかりプラモデルを

レジに並べて会計を済ませ、

再びバスで巖田町へ帰る。

「それじゃあ、1時間後。」

「ああ、1時間後に。」

バス停で別れた俺と灯俊は

そのままお互いの家へと向かった。

1時間後

再びバスで500円近くボツタクられて自宅に

たどり着いた俺はアミユスファイアを取り出して

GGOを始める準備をすると、

大型ゴーグルのような近未来的ゲーム機を被り、

目を瞑った。そして俺は自分の意識を

仮想世界へ誘う魔法の言葉を恐る恐る唱えた。

「…り、リンク…スタート。」

目を開けるとリアルな時間は

まだ昼間だというのに

赤く染まった空が目に入った。

視線を下げるとリアルの世界で見る建物とは

違った異様なビル群が目に入る。

「やつと来たか。遅かったなシヨウ。」

「ん？」

俺は声をかけて来た人物に視線を向ける。

視線の先には女がいた。

「いやたぶん誰かわかってるけど

取り敢えずお前誰だよ。」

「誰って俺はポイズン・トードだ。」

ポイズン・トードと名乗った

アバターは黒目黒髪で背は

180cmもある大女…ではなく、

ハンサムな大男だった。

確か前にMMOストリームで観た

第3回BOB優勝者も

こんな雰囲気のアバターだった気がする。

「はいはい、

俺のキャラネームはまんまでシヨウだから。」

「そか、ならリアルでもシヨウでいいよな？」

「いいけどさ、…ぶっ…くくくっ…」

いつも見ている親友の口調が

背の高い美女から聞こえてくるのだ。

こっちとしてはいくら

声が高くなっているとはいえ、

そのギャップに笑ってしまいそうになる。

「どしたのシヨウ?」

「いや：お前自分のアバターみたか?」

「ああ、見たよ。結構気に入ってんだが?」

背中まで伸びた髪を掻き上げる仕草まで

いつのまにか身についている。

「ハハっ、そうかそうか、なら良いや。」

「おっ、そのカップル!」

ちよーつと顔見せて。」

「は?」「へ?」

俺たちが揃ってマヌケな声をあげて振り返ると、

愛想の良い笑顔を見せながら

全体的に程よく日焼けした

筋肉モリモリのマツチヨの

サングラスをかけた男が近づいてきた。

さながら変t a :ゲフンゲフン、

ターミネーターのようだ。

「うおっ!?!」

「自分、アバターの

買い取りをしているゴードンと言います。」

意外に中身は優しそうだ。

「は、はあ…」

「そうですか…」

俺たちは突然のことに中途半端な返しをすると、

マツチヨマンは話を続けた。

「もしよろしければ

そのアバターをアカウントごと

売っていただけないでしょうか?

2Kクレジットで買い取りますよ。」

隣の灯俊ことトードの方を見ると、

軽く肩をあげてなんのこじやらの表情だ。

そして何か閃いたかのようにニタリと

口角を上げたトードを俺は見逃さなかった。
これは間違いなく悪巧みをするときの顔だ。

「ああ、別に良いけど…」

と、トードが言い出した直後、
きつと勘違いしているであろうゴードンさんに
こいつの正体を明かすべく俺は口を挟んだ。

「ちよつと待て。

ゴードンさん、こいつ男ですよ。」

『させるかよ』とトードを睨んだ俺に対して

トードは『引つかかったな。』とでも

言いたげに背の高さを利用して見下してきた。

一体何をどうしたらこいつの思い通りに
なっているのかわからない俺が反応に困っていると、

「え…ええええええええええっ!?!

ということはM9000番系!?

は、初めて見た…なら…」

と、驚いた様子で何かよくわからないことを
グダグダと言い始め、

しまいには衛星電話のようなものを取り出して
誰かと喋り出す。

「はい、はい…」

そうですか…。わかりました…!!

本当に5メガクレジットまで良いんですね?

はい…、わかりました師匠っ!」

さつきから思っていたが、

やっぱりこのゲームのアバターは

少しぐらい自分で選べるようにしないと

本人の性格とアバターの

容姿のギャップが凄すぎる。

そしてもう一つは、会話がダダ漏れだ。

「お待たせしました!あなたの…えつと…」

「トード。」

「すみません、トードさんのアバターは

M9000番系と言って

かなり希少価値の高いものですので

どうでしょう？

私に2メガクレジットで売るとい話は？」

完っ全に商人だが、

最初から手の内明かしているようだったら

ただのバカだ。

呆れた俺はメニュー画面を開いて

この近くのマップを眺め始める。

隣ではトードが

「おいおいおいおい！」

2メガ？冗談はほどほどにしてくれよオッサン。

M9000だぜ？出現条件しってる？

あ、しつてたらそんな値段出さないよねえ。

ごめんねえ、シロートバイヤーって

見抜いちやってごつめーん！

素人君、値段の件だが：

8メガ：いや9メガは欲しい所だ。

ま、嫌なら勉強してきなよ、

し・ろ・う・と・く・ん。」

：と、まじめに2、3週間凹むレベルで

バイヤーをコケにしている。

「そっ…ですか…ぐすん…」

では…気が変わったら…、

また…話しかけてください。」

と言って涙目で走り去って行った。

後が怖いぞーなんて感想を抱いた俺は

可能な限りの嫌味を言った。

「お前って本当に女だったら

絶対SMであんなマッチョ踏んでたよな。」

「……………」

しかしトードは俺からスツと身を引くと
わざとらしくドン引きした視線を向けてくる。

「…なんだよ…？」

俺のアバターに何か言いたいことがあるなら
言ってみろよ。」

「いや、友人の趣味だったり性癖だったりに

あーだこーだ言う気はねーんだけどな、

親友の俺がこういう容姿のアバターだからって
そんな妄想に当てはめるのは良く無いぞ。」

「…は？」

「だーかーらー、

いくらお前が美女に踏まれたい趣味を
持つてるからって

こんな超☆絶☆神美人アバターの俺を

そんな風に見て欲しく無いってこと。

だいたい俺も男踏むようなことしたくねーし。」
つまりやつ頭の頭の中では俺がDMということに
なっているらしい。

「否定しないところを見ると

お前って本当にDMだったんだな。」

「ちっげえよッ！勘違いすんなっ!!」

「なあシヨウ、

俺はこつちだと思っただが。」

「は？こつちだろ。」

俺とトードは武器屋を目指して路地に

入ったところまでは良かったものの、

完璧に方角を見失っていた。

「どうする？誰かに聞くか、トード？」

「誰に聞く？あの人なんかどうだ？」

トードが指差した先にいたのは、

まるでクマのような男だった。

身長は軽く190cmほどで、

点を組み合わせて構成された

森林迷彩のパンツと茶色のTシャツを着ている。

他の道行く人と違って

装備は何も身につけていないが、

周囲とは違う空気を纏っている…気がする。

取り敢えず話しかけてみる。

「すみません…。」

「俺に何か用か？」

俺は頭の中で、こう…

蛇に睨まれた蛙…じゃなくて

クマに睨まれた人類という気分になっていた。

いや、蛙は隣にいるんだが

「あの、自分たち初心者で道がわかんないんです。

この武器屋までの道と

現在地を教えてくださいませんか？」

あまりの巨大さに俺は逃げ腰になるが、

なんとか要件を伝えきる。

「わかった。」

だが…この辺りは道が入り組んでる…。
時間が…少しあるから…俺が道案内する。」
この大男のリアルは
コミュ障か何かかなんて失礼なことを
考えてしまうが、
とりあえず迷子を卒業できたことには感謝だ。

俺とトードはクマ…ではなく、
親切な大男の後ろに無言で付いて行くと、
あまり時間はかからず武器屋には数分で到着した。
「ありがとうございます。」
「ああ…。」

たどり着いた武器屋は
まるで路地裏のカフェのような雰囲気
醸し出していたが、
店先の看板に書かれた

『Guns & Armor』の文字が

その雰囲気冷たい空気で
塗りたくっているようだった。
俺とトードはドアを開けて中に入ると
なぜか大男も付いてくるが、
俺とトードはなんとなく気まずいので無視し、
店内を見回した。
薄暗い部屋の壁には沢山の銃がかけられており、
まるで博物館の展示品のように
上から照明で照らされていた。

「所持金はいくらだ？」

「うわっ!?!」

突然後ろから聞こえてきた

先ほどの大男の声に俺たちは2人揃って驚く。

「初心者…なんだろう？…俺が…見てやる。」

「ありがとうございます！」

えっと、俺はシヨウっていいいます。」

「俺はポイズン・トード。」

めんどいからトードでいいですよ。」

「そうか…。俺はエムだ。」

それと敬語は辞めてくれ。

ピト…いや、ゲームの中なんだ。

堅苦しいのは好きじゃない。

ところで、所持金は…いくらだ？」

「は、はあ…。」

わかり…あ、いや、わかった。」

俺たちはメニュー画面を開き、所持金の欄をみる。

「1000…クレジット…。なんか買えるのか？」

視界の隅に映る銃の値札を見て

不安になった俺はおそるおそる尋ねた。

「…難しいな。あそこのPDWタイプの光学銃と

エネルギーパックを買えばほとんど…無くなる。」

「じゃあどうすればいいんだ？何か方法は？」

光学銃のコーナーを眺めながら

ニタニタしているトードの隣で、

俺は実弾銃を手に入れる手段がないか

エムさんに聞いてみる。

「課金するか…Mobを狩って稼ぐか…。」

普通のプレイヤーなら

そのどちらかしかないだろう。」

「シヨウ、とりあえず光学銃を買わないと

何も始まんないんだ。とつとと買おうぜ。」

「はあ…しようがないか。」

エムさん、取り敢えずありがとう。」

「ああ…健闘を祈る。」

1時間後

俺とトードは荒野の真ん中で、

Mob相手に光学銃で無双していた。

「トード、この光学銃強くねえか？」

「んなわけないじゃん。」

だってここグロッケンofすぐ近くだぞ？

RPGゲームでいう始まりの町の一步外だ。

雑魚しかいねえよ。」

「そんなもんなのかねえ。」

あ、そういえばさ、

なんでこの光学銃にしたんだ？」

「ああ、コレか？」

ガンダムofビームスプレーガンを

モデルにしてるからさ。

なんでも、45周年ofコラボで

追加された中でも最弱らしい。」

「まあ、お前らしいっちゃらしいな。」

その後さらに数時間、

目に見える範囲ofMobはほぼ倒し、

ドロップアイテムを回収すると、

俺たちはグロッケンに戻り

よくわからないドロップアイテムたちを売却した。

2日後

今日も同じ場所で俺とトードはM o bを狩りまくり、
経験値もだいぶ貯まったので、

俺はステータスを上げることにした。

「シヨウ、どんくらい割合で割り振るんだ？」

俺はしばらく考える。

「うーん：最初だけ筋力4、敏捷性2、耐久力4で
行こうと思う。次回は器用さ6、

運4の割合にする。」

「そか。俺はA L Oからのコンバートだからなあ。」

「トードはどんな割合なんだ？」

「俺はS T R（筋力）優先だな。」

「S T R優先で光学銃って矛盾してるだろ。」

俺のツツコミにトードはしばらく固まり、

信じられないという視線を向けてくる。

「な、なんだよ…」

「S T Rが低かったら

ハイメガランチャーを持ってないじゃ無いか！」

「んなもん知るか！ガンダム馬鹿!!」

だいたいそれが実装されてるかすら

怪しいだろ！」

「じゃあねーだろ、

A L Oじゃパワーファイターだったんだからよ！」

俺がよくわからない単語を次々と並べるトードに
言い返そうとした時だった。

俺は突然左足首にジーンと痺れるような

痛みを感じ、直後に視界がグラッと傾いて

地面に叩きつけられた。
直後に銃声が1発響き、
やっと狙撃されたことに気付く。

「トード、伏せろー」

レーザー光線のような赤い線が

トードの体に当たるが、

トードはそれをひらりと躲して俺の隣に伏せる。

「クソツ遮蔽物が無い…」

トード、どうせゲームだ。

俺を置いて…うわっ!？」

左足首から先に赤いポリゴンが散って

歩けない俺をトードが

自分の筋力値にモノを言わせて担ぎ、

近くの岩場に向けて走り始める。

俺は相棒の肩に担がれて揺れる視界の中、

俺は2つの人影を確認したがその直後、

コンサート会場を連想させるほど大量の

バレットラインが俺たちを照らした。

――
ちよつと前

――
2人のアバターが狩りを楽しんでいる平野を
見下ろす岩場で、

大柄な体躯と無骨な顔のアバターが

真新しいスコープが載ったSG550の

バイポッドを立て、伏射の姿勢で

その時を待っていた。

『ダインよお、

なんでわざわざカップルを狙うんだよ。』

「俺たちのGGOにまで

入ってきたリア充への宣戦布告さ。

やつらにここがデートスポットじゃない事を
思い知らせてやるんだ。」

『いいじゃないですかギンロウさん。』

僕もこの後忘年会だからすぐ終わる方が

良いですし、ギンロウさんだって

リア充爆発しろとか言ってたじゃないですか。

外で沢山溜まったストレスを

ここで発散しましょうよ。』

『おーい、もう終わったっぽいぞ。』

ドロップアイテムの確認してる。』

スコードロンメンバーの報告通り、

不用心なことに2人は向き合って

メニューを開いたまま口論をしている。

「よし、俺が男の方を撃ったら始めろ。」

『『『了解！』』』』

4つの返事を確認した俺は

まずスコープの中心に男を捉え、

トリガーに指をかける。

距離は100mも無い。

「こいつ（SG550）なら楽勝だ。」

バレットサークルは風の影響で

わずかに中心をズレるが、

それを修正して男の左足首を狙う。

息を止め、バレットサークルの中にターゲットの

足が収まりきった瞬間、

ダインは引き金を引ききった。

撃ち出された弾丸は

バレットサークルが示した通りに

飛んでいき、男の足首を撃ち抜く。

男の体がぐらついて左に傾き、崩れ落ちた。
呆然とするもう1人の腹に照準を合わせる。

「女を撃つのは気がひけるが…」

俺に目を付けられた自分を恨め。」

緊張と興奮でバレットサークルが

若干広まったものの、

ターゲットの腹には十分収まりきった。

俺はもう一度引き金を引く。

弾丸は再びバレットサークルの示した通りに

飛んでいき、女に命中：することなく

地面に穴を開けた。

「チッ、外した。」

ギンロウ、女を仕留め損ねた。」

『あいよ、任せときな。』

2. 5

「あああああ〜〜ちぎしよ〜……」

狩りの帰りで襲撃された俺たちは、

グロッケンの酒場ですつかり落ち込んでいた。

さらに俺は今日1日かけて集めた

ドロップアイテムの中で最も嬉しかった

実弾銃、UZIを失った。

「どうするよトー……ド……?」

「アヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

やー、やられたねえ……くくく……

あつはつはつはつはつは！

イイ度胸じゃないか……

この俺に喧嘩売ろうなんてなあ……

ふふふ、射ってイイのは

射たれる覚悟のある奴だけだよ……くくくく……」

つ、遂にイカれやがった……。いや、前からか。

学校でのトードを知っている俺にとっては

日常的な気もしなくはなかったが、

周囲の他のプレイヤーたちの目には

銃と鋼鉄の世界というだけで非日常的なのに、

発狂する一歩手前っぽいヤツが

ぶつくさ呟いているのは、

かなり危なく見えたらしい。

周囲からプレイヤーが離れていき、

遠くからまるでゲテモノでも

見るかのような視線を送ってくる。

しかもよく考えたらトードのアバターは

M9000番系だ。

つまり、はたから見れば
美人なお姉さんが発狂一步手前で
なにか呟いているのだ。

俺はトードとの間に1つ分席を空けた。

トードは1つ俺側に詰めてくる。

「なあトード、

お前って周囲の視線は気にならねえの？」

「シヨウ、復讐しに行くぞ。」

「うんいいけどまず話を合わせようか。

ていうか誰かもわかんねえ奴に

復讐って無理だろ。」

「大丈夫だ、問題ない。」

「いや大有りだって。」

学校と同じようにボケるトードに対して

いつものようにつつこむ。

違う事といえればここは仮想世界で、

トードが超・絶美人な

外見ということくらいだろう。

別に羨ましいとかじゃない。

だから『神』までは言っていないし。

「今回はガチで大丈夫。

俺、奴らが無線に話しかける声が

聞こえたんだよ。」

「なんて言ってた？」

「『ダイソヨオ、くく』って感じだった。」

「どこまでが名前だよ？」

「ダイソって名前。B O Bに出てて

軽業スキルが凄えシヨットガン使いに

ぶっ殺されてた。」

「ふくん…でも今の装備じゃ勝てねえぞ…」

「だよなあ〜」

いつの間にか人気の薄くなった酒場に沈黙が広がる。

「よし…：しようがない。無課金でいくぞ。」

「ん？ああ、わかってる、

アミユスファイア買ったたら金欠だよな…」

「そうそう…：今月厳しくてさ…：って、

小遣いくらい貰えるっての！」

「そーなのかー？」

なんか…：顔が美人だけど

中身知ってっからうぜえな…

「煽ってる？」

「いや、金が無いから無課金なんだよな？」

「ああ、金が無いから無課金だ。」

えっと課金の最低金額が

千円で10万クレジットだから…

1万円くらい課金して100万クレジットにしよう。

それで装備を整える。」

「へっ…：？」

あれ…：？なぜトードは固まってる？

「バグった？」

「いや…：無課金だよな？」

「ああ、無課金だ。」

「ん？」

「ん？」

「シヨウ…：無課金の意味知ってる？」

突然の質問に俺は意味がわからず困惑するが、

無課金と言ったら意味は1つしかない。

「ああ、無理のない課金だろ？」

「ちげえよっ!!遂にボケたか!？」

「誰がボケだ誰が！」

どつちかつつたらボケはトードだろ！」

「やかましいー！危うく勘違いするところだったぞ、

いや勘違いしてたけどさ！」

「とにかく…。」

貯金は頑張れば1万円くらい残せるだろ？」

「ああ。でも2人だけじゃまだ足りない。」

「トードはあてがあるのか？」

薄ら笑いを浮かべる美女擬きに聞き返す。

「ああ、此方にちよつとした知り合いが

居るかも知れねーんだ。」

そう言うのとトードはメニュー画面を開く。

「試しに奴のネームで

インスタンスメッセージ送るぜ。」

宙に浮かび上がったキーボードで

メッセージをつくり、送信する。

数分経ったが返事は来ない。

腕時計はすでに18時半だ。

「とりあえず今日はもう落ちよう。」

「そだな、じゃあメールの返信が来たら

リアルでLINEすつから。」

とある下宿の12月29日の朝。

訳あってトードのリアル、明日葉灯俊と

幼馴染の霧島葵が住む下宿の

家主を務めるアルゴこと檜舟素子は

いつも通り早起きな灯俊と朝食を取りながら

藪から棒に話を切り出した。

「ところでトーフ、

GGOの方はうまくいってるのか？」

箸を止めた灯俊は軽く舌打ちして

大きいため息を吐いた。

「なんで知ってるんだよ。」

「そりゃあオレっちだって

GGOに協力者は居るからナ。」

素子は当たり前だとも言うような仕草で

コーヒーに口をつける。

今度はGGOで自分が逃げ惑う映像をネタに

揺すられるのだろうかと不安になる。

「じゃあその優秀な協力者に頼んで

俺たちを導いてくれよ。」

「無茶言うなヨ。」

オレっちにとつてはトーフだつて立派な協力者ダ。

協力者同士を合わせるわけにもいかないダロ。

…いや…待てヨ…」

投げやりに答えた灯俊の頼みを

素子は即却下するが、

顎に手を当てて何か考える。

「トーフの新しい仲間ハ

オレっちとトーフの繋がりを知ってるのか？」

「言うわけねえだろ。」

何が起こるかわかったもんじゃねえ。」

「にやハハハハ、

さすが前科者は流石に理解が早いナ。」

灯俊は嫌なことでも思い出したのか、

具が無くなつた味噌汁を一気に飲み干す。

「…それで？」

俺の相棒はどうにかなるのか？」

「ああ、トー坊とまだ見ぬ初心者くんが

別行動をするなら初心者くんのサポートに

協力者を当てておくゾ。」

灯俊は本当にその協力者は頼りになるのかと

疑いの視線を素子に向けるが、

あのSAOからありとあらゆる仮想世界を

情報屋として渡り歩いた女だ。

『信用』という単語においては

何の問題点も無いだろうという結論に至り、

首を縦に振った。

ALOでは相談役として名の通るトードの

思わぬ苦戦をおかしそうに笑う素子に灯俊は

真剣な眼差しで別の話を繋いだ。

「ああ、あと葵をコンバートさせるから頼んだ。」

「装備が必要なんダロ？」

「ああ…、まあ…」

「にやハハ、

オネーサンはなんでもお見通しだゾ。」

「なら聞くな。コイツを頼む。」

灯俊はスマホからGGOの攻略サイトを呼び出すと、

何枚かの写真を見せた。

「ああ、難しいがやってみるヨ。」

数時間後。

壱津島高校からほど近い場所にある

カフェのカウンターで、

このカフェの店長を務める菅原さくらは

SAAのモデルガンを手入れしながら、

古い物が好きな割に珍しくタブレット端末で

通話している。

「それで？」

そのシヨウとかいう名前のプレイヤーに

接触すれば良いのかい？」

『まあ、そういうことだな。

それと、今してる調査に関係あるから

あまり口外しないでくれヨナ？』

「わかってるさ。」

人の気配を感じたさくらは一方的に通話を中断し、

端末を伏せるとバーカウンターで

いつものすまし顔に切り替える。

「へい、リーダー！遊びに来たよ！」

陽気な挨拶とともに入店したのは

客ではなくこの店の従業員である

杉下りんだった。

「遊びじゃなくて仕事じゃないのかい？」

ちなみに5分の遅刻さ。」

幼馴染特有のテンポで

早速ツツコミをかましたさくらは

SAAを手入れする手を止めて腰に手を当てる。

「まあまあまあ、それは置いといて…」

今日は何すれば良い?」

まったく店長と従業員という立場を

わきまえていないやつだが、

今のところ唯一の従業員であるためそう簡単に
解雇するわけにもいかず、

こんなやりとりが数年続いている。

「そうさね…、今日は店先の掃除でも

してくれないかい?」

「おし、了解!」

りんが外へ出たのを見送ったさくらは

スリープモードに入った端末を再び呼び出すと、

端末を操作してファイルを選択しながら

話題を切り替える。

「それと、報告をいいかい?」

『何か動きがあったノカ?』

「ああ。ファイルは見たかい?」

『これは何なんだ?』

さくらは送信したファイルを開いて

タイトルも何も無いグラフを選択した。

「壱津島に密輸された銃火器の数さ。」

「ここんとこ多くてね。」

「ヤツら何か企んでるんじゃないのかい?」

『確かに多いナ…。』

「オレっちの方で調べとくヨ。」

3. 5

翌日、12月30日。

約束通り1万円、GGO内で言う100万クレジットを課金によって手に入れた俺たちは、各自自分のプレイスタイルに合わせて装備を揃えるということで別れた。

「…とは言ったものの…。」

どうすればいいかわからない。

大通りを歩けば規模の大きい大手の

外資系スーパーを思わせる大きな店舗が

口を大きく開いており、

クリスマスや年末年始の影響で

GGOを始めたニュービー同志諸君が

次々と飲み込まれて行く。

入り口の上にはホログラム広告で

やれ年末特価だやれ在庫処分だと宣伝しているのだが、

いざ入ってみれば並んでいるのは

大抵がM16やM4A1を代表とする

AR15系ライフルの仲間たちだったり、

AKMやAK74から派生したAKファミリーと

その一味だったり、どれも似たり寄ったりで

いまいちピンとこない。

まあ聞くところによると、

ここは復活地点に最も近い初心者向けの

総合ショップだというから、

誰もが見たことのあるAR15シリーズや

AKシリーズの方が売り上げが伸びるのだろう。

俺もステータスは100万クレジットのお陰で

中堅プレイヤー並みだが、

実際問題中身は初心者だしここは無難に
M4A1でも買おうかと思っただが、
それでは面白みが無い。

「なんかなあー…100万クレジットもあるのに
普通の銃買ったも…ねえ…」

誰にでも無く自分にそう問いかけるほど

“普通”ではない事を望んでいる俺は
同じような銃ばかりが

展示されている壁面の前で回れ右すると、
もつと自分の心、魂、そしてロマンを刺激する
銃を求めて店の外に出た。

そして超絶美人なバニーガール風NPCに

『またお越しくださーい！』と見送られた俺の目に
ふと1つの看板が目にと留まった。

電光掲示板やホログラム広告がほとんどの中で、
唯一と言つていいその金属板で作られた看板に
刻み込まれた

『弾薬から不動産までなんでも売買』

という謳い文句と、『ロス商会』という店名には
「へえ…『なんでも』…か…」

俺の好奇心を大いに惹きつけた。

俺は早速マップを開いて

ロス商会の名前を検索にかけると、
現在地の店からかなり離れた

SBCグロッケンの外れの路地に

その店を示すピンが立てられた。

「遠過ぎだろ…」

看板の雰囲気を見ればなんとなく理解できたが、
それにしても遠い。

だがどんなに長い道のりでも

最初の一步を踏み出さなければ

それは後退と変わりない。
俺はロマン求めて一步踏み出した。

1時間とそこそこの時間が経過。

ようやく辿り着いた路地は、

一言で言い表すならば貧民街とでも言うべきか。

グロツケン中心部に立ち並ぶメタリックな質感の

高層建築物と違ってコンクリート製の建物が多いが、

どちらかといえばこちらの方が

現実世界に近いため、

人通りが少ないことも重なって

どこか落ち着いた空気が流れている。

マップを拡大してさらに細かくピンの周囲の地形と

実際に見る景色を比較していると、

背後からトントントンと肩を叩かれた。

「ちよつとアンタ、道案内は必要かい？」

「あ、はい…えつと…、ロス商会つてとこを

探してて…つて…はい？」

離島&田舎住まいの住民性とでも言うべきか、

見知らぬ人へのペラッペラに薄い警戒心のせい

でアツサリと行き先を喋った俺は

呆けたような表情で

話しかけてきた女性を見上げた。

艶のない紺色の生地で作られた

深いスリット入りのチャイナドレスを

着こなすその女性は、

まるでバラを思い起こさせるような

背中まで伸びる美しい赤毛を掻き上げる。

「それなら知ってるよ。着いて来な。」

知らない人なのにホイホイ着いていった俺は誰かに襲われたりする事も無く、グロツケンのいたる所に点在すると言われる地下迷宮の入り口へ突き落とされる事も無く、ゲームの中の世界にしてはかなりすんなりと目的地まで案内してもらえた。

まさに他力本願万歳だ。

「ここがロス商会。」

そしてアタシが店主のローズさ。」

立ち止まって振り返った女性は

秘密の隠れ家の入り口のような雰囲気

醸し出す地下室への階段を指し示すと、

サラツと自己紹介を交えた。

「え……つと……」

「しっかし珍しいねえ、

ウチの店に用があるプレイヤーが居るなんて。」

そりゃあんな地味な看板に加えて

入り口がこんな隠れ家じみた場所なんだから

プレイヤーの目に留まる確率はゼロが

小数点の後ろに何個付くか分かったもんじゃない。

「まあ、いいさ。外でいくら喋ったって

お互いに一銭の得も無いんだから

さっさと中に入りなよ。」

「は、はい……」

見えない糸に引き寄せられるように

店へ続く階段を降りた俺は、

ローズさんに続いて自動ドアから店内に入った。

店内の照明はGGOの建物では珍しく裸電球で賄われており、

薄暗い店内はどこか秘密の会場場所のような空気に覆われていた。

壁際に目をやると、

見覚えのあるがどこか形が違う銃や、見たこともない形の銃、

そもそも銃なのかすら怪しいものが

ガンラックで壁から吊るされ、

各ガンラックの上から室内の雰囲気

乱さない程度の小さな明かりが灯されている。

ローズさんは銃にかけてある壁の

反対側を占拠するバーカウンターに入り、

「今日は休みだったけど、

こうしてアンタと会ったのもなんかの縁。

アタシが軽く紹介するから

わからないことは何でも聞くといいさ。」

「すみません…、ありがとうございます。」

「まずは…そうさね…、

アンタ、銃についてどのくらい知ってるのさ?」

俺は沢山の銃が並ぶ四方の壁を

記憶の中の画像と照らし合わせてみても

見覚えのある銃はほとんど無い。

「…知ってる銃は無いです。」

「へえ、ならアタシが適当に選んでいくよ。」

ローズさんは奥の赤い壁に向かって

おもむろに一丁のライフルを掴み上げて

俺の方に放り投げた。

「うわっ、ちよつとっ!!」

慌てて落下地点に滑り込んだ俺は、

これまで使っていたサブマシンガンや

光学銃とは比較にならないほど

ズッシリとした感覚に僅かながら興奮を覚えた。

「AK…47？」

いや、でも47は樹脂パーツなんて無いし：

AKMとはハイダーの形が…」

「なんだ、47とMの違いが分かんのかい？」

ローズさんはわざとらしく

驚いたような表情を浮かべるが、

俺に言わせてみれば正規品のAK47とAKMを

見分けるなんて朝飯前だ。

「流石にわかりますけどコレは…」

「AK104。」

「はい？」

ポツリと呟かれた初耳の名前に俺は

間抜けな声を出して答える。

「でもAKって74Mが最後なんじゃ…」

おぼろげな知識で答えながら

腕の中の黒く無骨なライフルに目を落とすと

ローズさんの声がダメ出しを運んでくる。

「その知識じゃアンタもまだまださね。」

104はAK100シリーズの1つで

初代AK47と同じ7.62×39mm弾を使うカービンさ。

まあ、基本は変わらないから

ある程度の知識があるなら使い易いはずさ。」

「うーん…」

いまいちピンとこない俺が眉間にシワを寄せて

唸っていると、

ローズさんは俺の腕からAK104を取り上げた。

「えっ…」

きつとオモチャを取り上げられた子どものような
顔をした俺をローズさんは見下ろし、
真剣な眼差しを向けてくる。

「いいかい？いくらここがゲームの中でも

武器は命を預けるもんだ。

少しでも納得がいかないんなら

徹底的に悩んで結論を出すべきなのさ。

わかったかい？」

「…はい。」

知り合って間もない赤の他人のために

ここまで真剣に考えてくれる…

母性本能溢れるローズさんの対応に、

何も教えてくれないNPCやど素人のトードしか

アテのないGGOというゲームの中で

こんな体験をできると思ってた俺の目尻には

嬉しさのあまり薄っすらと涙が浮かんでいた。

「ほら、わかったら次行くよ！

…ってアンタなんで泣いてんのさ!？」

「いや…、なんかもう嬉しくて…!」

AK104に続いて、
M4を折り畳みストックにしたLR300や、
我らが大英帝国の誇る

全自動トラブルマシンのL85A1、
知名度低いけど意外と優秀な

FNCOの妹分のAK5C：etc

その他諸々の銃を手に取り、

シューティングレンジに入っては

試し撃ちを繰り返す俺だったが、

ついにお気に入りの1丁を見つけ出すことは
できなかった。

「あんたもなかなか癖の強い男さね…」

「ああ、えつと…すみません…」

「しつかし…どうしたもんかね。」

もうウチの店には

これ以上の銃は置いてないのさ。」

困り果てたローズさんが組んだ腕の上で

ムニムニと形を変える双峰の向こうで、

作業台の上に無造作に置かれた

ライフルが目にと留まった。

「ローズさん、アレは？」

「ん？何かあったのかい？」

俺の指差す方向へ振り返ったローズさんは

ああ、アレかい、と言いながら作業台まで

向かって「アレ」を持ってきた。

「LE901-16s。」

最近入荷したやつで、入手条件は確か…」

「AR-10系ですか？」

入手条件よりもどんな銃なのかを知りたい俺は

ローズさんの話の腰を折る勢いで
LE901-16sに飛びついた。

「半分は正解さ。」

ローズさんは苦笑しつつも、

俺からLE901-16sを受け取って
アッパレシーバーとロアレシーバーを
固定するピンを外すと、

「でもただのAR-10じゃないのさ。」

こいつはこうして…」

アッパレシーバーをカウンターに置き、
作業台に載っていた一回り小さな

アッパレシーバーと

金属製のパーツを組み合わせて、

金属製のパーツをロアレシーバーに

滑り込ませるように組み込んでピンで固定した。

「5.56mmも撃てるようにできるのさ。」

「おお…!!」

使いやすく威力があるAR-10系は

PvEで重宝されるが、弾薬が嵩張るうえ、

反動が強い事が難点のライフルだが、

反動が小さくて大量の弾薬を持ち運べ、

PvPで重宝されるAR-15系に

組み替えられるというこのライフルは

俺のハートをガツチリと掴んだ。

「撃ってみるかい?」

「はいっ!というか、買います!」

「まあ、落ち着きな。」

他にも必要な物はあるはずさ。」

さつそくLE901―16sを20万クレジットで
買い取り、続いてハンドガンの並んだ
ショーケースの前に向かうが、

ここでは迷う余地は無い。

「少し前まで拳銃は9mmが

メジャーだったけど今は45口径と

40S&Wがいい勝負さね。あんたは？」

「45口径以外有り得ないです。」

「そうかい。じゃあ、この辺の…」

無いはずだったが、

ローズさんが指し示すショーケースには

俺が崇拜してやまない1911シリーズが

1丁も存在しなかった。

「これとかどうだい？」

そして渡されたのはポリマーフレーム製の

部品で構成された近未来的なデザインをした

ドイツのUSPだった。

「いや、あの…」

「じゃあこっちのー」

なおも止めどなくローズさんの手の中に

現れてはショーケースへ戻される

45口径オートマチックとリボルバーたちだが、

その中に1911シリーズの姿は1つも無かった。

「ストップストップ！」

ローズさんの手を止めた俺は落ち着いて

ゆっくりとしたトーンで尋ねた。

「ローズさん、ガバメントは無いんですか？」

「無いね、そんなもの。」

即答だったが、その手には新たな1丁が

握られている。あまり気は進まないが、

おすすめを聞きもせずに切り捨てるのは失礼だ。

「…で、それは何ですか？」

「H&KのSOCOM Mk23だ。」

差し出されたのは拳銃と呼ぶには

いささか大き過ぎる代物だった。

「…デカっ!？」

率直な感想を漏らした俺の視線の隅で

ローズさんの手には次の拳銃が握られている。

「ならこれなんかどうだい？」

次に差し出されたのはさっきのMk23を

拳銃と呼べるサイズまで

縮めたようなデザインの銃だった。

それを受け取って構えてみると、

セーフティレバーやスライドストップ、

マグキャッチが妙に懐かしい位置に

収まっていることに気付いた。

「Hk45Tだ。」

アメリカの特殊部隊のために作られた

フォーティーファイブ。

だから操作方法はガバメントに

似せて作ってあるのさ。」

言われてみれば、俺の大好きなガバメントと

本当に似ている。そして…

「これには何発入るんです？」

グリップの太さから装弾数の多さを察した俺は

ローズさんにそのことを尋ねると、

ローズさんは俺の握る

Hk45Tのマグキャッチだけを器用に操作して

マガジンを取ると、

ストレージから取り出した45ACP弾を

装填していく。

「10発さ。それとサプレッサーも。」

渡されたマガジンとサプレッサーを装着し、スライドを引いて初弾を装填した時だった。

「物は試しさ。好き嫌い言う前に使ってみな。」

ローズさんがそう言つてメニュー画面を操作し、空中にカウントダウンが表示された。

『3...2...1...ビビィー!』

店の壁際の天井からステイルターゲツトが次々と現れ、何をすればいいか理解した俺はターゲットめがけて引き金を引いた。

パアーンツ パアーンツ パアーンツ

サプレッサーで発射ガスを封じ込まれた

45口径弾は、くぐもつた銃声とともに

全弾がステイルターゲツトに命中した。

少し悔しい気もするが、優秀な拳銃だ。

「どうだい?」

「...買いましよつ。」

4.5

ローズの店で武器と弾薬を手に入れた俺は、
ついでにメニュー画面からスキルツリーを開いた。

俺のアバター『シヨウ』は

まだ初心者でレベルも低いアバターだが、
何を隠そう、重課金なのでスキルポイントは
ガツポリ腐る程ある。

スキルを割り振るならメインアームの

LEGOLISのスペック的に

ポイントマンやライフルマン、マークスマンが
無難なところだ。

俺はステータスの設定画面を呼び出した。

課金で手に入れたステータスポイントの

半分を使ってSTR（筋力）とVIT（耐久力）、

AGI（敏捷性）を上げてポイントマンに

必要な最低基準より少し高い値を満たす。

今度は残ったステータスポイントの

6割をDEX（器用さ）に、

4割をLUX（運）に割り振った。

ステータスがどんどん上昇していく中で

知性を表すINTが忘れないでくれと

言いたげに『0』を示しているが、

知らん。分からん。そんなもの無かった。

続いて開いたスキルツリーでは

スナイパー用のスキルから探知能力と

視力を上げるホークアイ、

自分のハイディング能力を一定時間上げる

ハンティング、バレットサークルを安定させる

サジェスチョンを習得し、

武器作製のスキルからトラップ作製スキルや
ナイフ作製スキルを習得した。

ナイフ作製スキルを習得した時に

表示された銃剣作製スキルに目を引かれたが、
ナイフ作製スキルの熟練度が足りないうえ、

スキルポイントも圧倒的に足りないので諦めた。

同じように銃器系のスキルツリーでも、

パーツ製作スキルや弾頭カスタムのスキルへ

スキルポイントを齧る程度に割り振って

ようやくシヨウとしてのキャラが完成した。

まあ、パーツや弾頭は経験値が無さすぎて

設計図が大量に必要な有り様だが、

そこはぼちぼちやっていけば良いだろう。

「ふう…。」

ひと段落ついたところで息を漏らした俺の肩を

トードの華奢な手が叩く。

「終わったか？」

「ああ、あとは何回か練習すれば行ける。」

本当ならチュートリアルくらいは受けたいが、

とりあえず何とかなるとしか思っていないトードが

その話に乗る確率は限りなく低いだろう。

俺は少し願望を含めてチラリとトードを見る。

「そっぴやシヨウ。お前、チュートリアルは？」

「え…？」

まさかトードがこんなことを言い出すとは思わなかった。

その驚きが俺の思考を嬉しさのあまり停止させた。

トードの笑みにも気付かずに。

メニュー画面からチュートリアルを選択した俺は
直後に青白い光に包み込まれたかと思うと、
どこかの屋内射撃場に転送されていた。

目の前にはSっ気たつぷりの露出たつぷりお姉さんが
こつちを睨んでいる。

「よく来たな、ウジ虫！」

「あ、どうも…？俺？」

「そうだともし」

ウジ虫で無ければ父親の○○が母親の

マリアナ海溝にぶち込まれた時に溢れ出た

○○カスだ。」

なんだこのいきなりの下ネタは…

「良いか、ウジ虫！この世界には異形のモンスター、

狂った機械、殺人を好むプレイヤー、その他、

平和ボケした開拓民が毛嫌いするモノの特売日状態だ。

今からこの私がこのクソ溜めで貴様がウジ虫から

立派なハエになる術を叩き込んでやる！」

成長してもハエかよ…

「苦しくてもう辞めたいとか愚痴を

貴様のフニャ○ンから垂れる○○みたい

こぼす前に気合いを入れろ。」

そして再び下ネタ。

このセリフの声を吹き込んだ声優さんには

頭が上がらないほどの迫力だが、

このお姉さんに頭を下げると冗談抜きで踏まれそうなので

意地でも下げる気は無い。

「はいッ！」

「返事は yes, ma'am だ！」

なんだこの理不尽!?

「い、いえす、まーむ！」

「ふざけるな声を出せ。」

ただ、対人戦闘では対光弾防御フィールドで威力が減衰する。対して実弾銃は文字通り質量のある弾丸を放つ。

威力が強く、防御フィールドでは防げない。

しかし、風などの影響を受けやすく、弾倉が重く嵩張る。

セオリーとして対モンスター戦には光学銃、

対人戦には実弾銃だ。

そのクソしか詰まってない頭に入れておけ。」

「イエス、マアムツ！」

「それでは、銃の基本的な扱いを教える。」

教官NPCはそう言うといきなりどこかから取り出した

M16A1を俺に向けてトリガーに指をかけた。

赤いバレットラインがレーザービームの如く

俺の額まで伸び、

「うわっ!?!」

剣道をしていた経験からか、頭を傾けて回避した。

「バレットラインだ。」

敵が銃の引き金に指をかけた瞬間に発生、

そのライン上に弾が飛んでくる。

そのクソしか詰まってない飾りの頭が

お前の体に必要なら避けるか撃ち返すかしら。」

もつと何か言ってもらえると思ったが、

やはりNPCだからなのか

決まった受け答えしかできないようだ。

M16を渡された俺はマガジンを確認し、

チャージングハンドルを引いて初弾を装填。

体的に対して斜めに向け、

伸ばした左手はハンドガードの中程を。

力を抜いた右手はグリップを優しく握り込む。

「貴様何を見てその構えになった!」

「ひゅえっ!?!」

情け無い悲鳴をあげた俺に追い打ちをかけるように
教官NPCがまくし立てる。

「スクリーンに映るヤツらから学べるのは
ウジ虫以下のやり方だけだ！」

スクリーンに映る素人どもと同じポーズで満足か？

映画館はガールフレンドとイチャイチャして

次のズッコッコツコンに進む場所だ！

貴様のようなろくにストーリーも

理解しようとしないうジ虫が

気安く入れる場所じゃない！

わかつたら脇を締めてもつと脚を広げろ！」

「イエス、マアムツ！」

もはや半泣きである。

「引き金に指を掛ける。

これがバレットサークル、弾道予測円だ。

ウジ虫が引き金を引けば、

その円の中に弾がランダムに命中する。撃ってみろ！」

バアンツ

1発の銃弾が発射され、

300mほど先のペーパーターゲットに命中した。

「素晴らしい！お前はウジ虫の中でも最高級に

ウジ虫だということが証明された！」

褒められ…てるのか、これは？

「次だ！移動ターゲットへのセミオート射撃！」

「イエス、マアムツ！」

数分後、何十発という銃弾を右へ左へ、

上へ下へと動き回るペーパーターゲットに撃ちまくり、

チュートリアルはようやく山場を過ぎた。

「見事な射撃の腕前だ！

貴様はマークスマン向きだな。

精度の高い銃に高倍率スコープを載せて

中距離の敵と戦うと良いだろう。」

「お、褒められた？」

「次はナイフの扱いについてだ。」

「ええっ!?まだあんの!?!」

Another face

5.5

俺の朝はいつもと変わらず、

LINEの確認やスマホゲームのログインと
続くはずだったが、その日の朝、

1月1日はLINEの通知が俺が寝ている6時間30分で
80件を超えていることに対する驚きで始まった。

ちよつとした寒気を覚えるほどの

ホーム画面に連なる送信者の名前は

もちろん全てが『ポイズン・トード』だ。

ちなみに単純計算で5分に1回のペースで
送って来ていることになる。

暇人め…。

まず1番古いメッセージは『あけおめ』だ。

だが数分後からまるで別人のように

メッセージを送ってきている。内容はずっと、

「この前言ってた知り合いと連絡が取れたから

早くグロツケンに來い。」的なことだ。

つまり俺が新年をベッドで初夢も見ないほど
ぐっすり眠って迎えている間、

トードはグロツケンで待っていたのだ。

「ヤッべっ…」

アミユスファイア、アミユスファイア…つと。

準備よし。」

俺は自室のドアに

『仮想世界で友達に課題を教えしてもらって来る。』

と嘘を書いたメモを貼り、

アリバイ作りのために冬季課題の写真を適当に撮り、スマホ経由でアミクスファイアにダウンロードする。たかがゲームのためにこんな嘘をつくことに罪悪感を覚えるが、

そんな気持ち振り払って再びベットに潜り込んだ。

リアルは真冬だというのに相変わらず赤茶けた空のGGOに俺は降り立った。

俺はメニュー画面を開くと

すっからかんのフレンドリストに

唯一載ってるトードをタッチすると、

ログインしたことを報告するメッセージを打ち込む。

数分後、受信欄に1つのメッセージが返信された。

酒場に来いの一言だ。

俺はGGOでは体力が関係ないことを

いいことに短距離走と同じかそれ以上の

速さで酒場まで猛ダッシュで向かい、

メッセージに添付されていた個室に入った。

トードと向かい合って座ると、

堰を切ったようにトードが話し始める。

「ねえ…なにしてるの？」

俺が何時からここで待ってたと思う？

この前言ってた知り合いが

こっちにコンタクト取ったのが昨日の11時半な。

で、そこから色々メールして

お前が来たら連絡って落ち着いた。

で、その時点で十二時な。

でよお、お前に早く伝えてやろうと思って

連絡したんだ、でもよ、お前でないじゃん？

しょうがないからログアウトして

LINEしたけどでないじゃん？
しょうがないからまたログインしてから
街をぶらついてたわけよ、
で、少し経ってからお前に
メッセージ送ったけど音沙汰なし、
またログアウトしてLINEして
十分経っても既読付かねえ。
でさ、お前がスマホと
アミューズファイア同期させてんの思い出したんだよ。
それまでいちいちログアウトと
ログインしてたんだぜアホみたいだろ？
でよ、しょうがないからログインして
俺のスマホと同期したウインドウ眺めてたんだよ。
で、一向に既読つかなくてよ、
そーいえばスキルスロット余ってたからよ、
適当なの取ってスキル上げてたんだ。
ウインドウチラチラ見ながらだけどさ、
全体の1/5くらいの熟練度になったんだ。
俺がどれだけ待ってたかわかるか？
六時間半：いや、七時間は待ってたからな。
ねえ、何してたのお前？
まさか俺のメッセージ無視して
コンバット（性○理）してたの？
ねえ？お前バカなの？死ぬの？ねえ？」
雰囲気は部活の剣道の練習に遅刻した時の
先生と同じだが、
いかにもマンガの中のキャラクターが
言いそうな長文のセリフを
噛まずに言い切ったことに
俺はある種の感嘆を覚えた。
だが同時にこうも思った。

「いやいや、死にはしないし」

コンバットもしてねえけどよ、

年末年始を寝て過ごすならわかるけど

GGOでボツチって馬鹿か？

みんながみんな新年に

初日の出待って徹夜するって思うなよ？

現に俺は寝てたんだし。」

「まあ、VRMMO初心者に言ってもしやーない。

俺は寛大だからな、今回は不問としようじゃないか。」

最後の『不問としようじゃないか』を

妙に強調して言ったトードの口元は

なぜかニヤけている。

顔の感情表現がオーバーなVRMMOで

こんな中途半端な表情を

浮かべれる女…じゃなくて男は

そんなに居ないだろう。

「それと前回言ってた知り合いの他にも

もう1人呼んだんだ。もうそろそろ来る。」

そして待つ事数分。

「やお待たせトード。」

1人の男の子が入って来た。

150cmほどの身長で癖毛がある。

例えるなら…犬耳だろうか？

「トード、お前ってシヨタコン？」

「ちげえよ、こいつのリアルは女だ。

ていうかアバターおかしくねえか？」

トードは出入り口から動かない男の子を

ジッと見つめると、

何か閃いたように「あつ」と声をあげる。

「カトラス、ステータスウィンドウ見せろ。」

宙に浮かぶ画面を覗き込んだトードは

何がおかしいのかやつと教えてくれた。

「カトラス、喜べ。お前…男だぞ。」

「え…?」

画面をまじまじと見つめるカトラスの

口元が次第に緩む。

「フッフッフ…よしっ、よっしやああ！

神はオレを見捨てなかつたっ！」

いやいや、待て。ある意味見捨てられてるから
こういうミスが起きるんだろ…

個室のテーブルの上を

ピョンピョン飛び跳ねまわるちっちゃい子は

そんな俺の内心を知ってか知らずか、

彼、いや彼女…違うな。やっぱり彼。

彼の喜びのダンスは終わりが見えない。

「トード、そういえば

連絡が取れた知り合いは？」

いつの間にか自分のメニュー画面を

開いていたトードに聞くと、トードは顔を上げる。

髪を掻き上げる仕草が様になっていて

俺は危うく天使の矢に射抜かれそうになったが、

それより先に彼女…じゃなかった彼の口が

開かれ、俺の質問に答える。

「10分後にALOからコンバートして来る。

スタート地点で待ち合わせだ。」

トードは立ち上がると

個室のテーブルをステージ代わりに

飛び跳ねていたカトラスの足を掴み、

逆さまの状態を持ち上げる。

「わっ!？」

おいトード！何すんだよ！

レディーにそんな事して恥ずかしくねえのか！」

あ…コイツ男と女を

使い分けるヤバいやツだ…

「何言ってるんだ？」

俺の外見は女でお前の外見は幼児。

さあどつちが恥ずかしいかなあ。」

ダメだ。

こつちも同類だった…

SBCグロツケン
リスポーン地点

トードに連れられて

スタート地点に辿り着いた俺の視界に
ガチガチのSWAT装備に身を包んだ
黒づくめの兵士たちが映る。

「よく6人も集められたな。」

「ちげえよビショップ。こっちだ。」

そう言つてトードが顎で指した方には

GGOでは珍しい女性プレイヤーが2人いた。

1人は黒目黒髪のロングヘアで、

もう1人は細いペールブルーの髪を

無造作なショートヘアにしている。

向こうはこちらに気が付いていないのか、

近づく俺たちに警戒しているようだ。

そしてこの不躰者は突然言い放つ。

「やあやあ、これは第三回BOBの

性別詐称プレイヤー様のキリトじゃないか！」

トードの『性別詐称』に俺は首をひねるが、

当の黒目黒髪の女性プレイヤーは

腹を抱えて笑っている。

「トード…お前のことだろ？」

「まあな。そして…」

やあ！久しぶり、シノのん。」

「アンタにそう呼ばれる筋合いは無いわ。

そう読んでいいのはアスナだけよ。」

「こいつらは第3回BOBチャンピオン。

見た通り弄ると面白い。」

「ちよつとーへんなこと言わないでくれる？」

「だいたい何を根拠にそう思うわけ？」

「ほらな？」

GGO最強ガンナーを弄る友人って

どういうやつだよ：

「…まあいいわ。」

でキリト、アンタ何時まで笑ってるつもり？」

「いや、悪い悪い、だって相談役が…ぷふっ」

「テメエ…覚えとけよ」

やっと笑いが治ったキリトが

俺の方を向いてニコつとする。

彼といいトードといい：

どう見ても女にしか見えない。

「悪かったって。そんなに怒るなよ。」

それで、隣の2人は？」

「俺はシヨウ、トードのリアルでの友人だ。」

そしてカトラスの方に視線が移る。

「その子は…NPC？」

「そんな訳ねえじゃん！」

オレだよ、カ・ト・ラ・ス！」

半分戸惑ったように疑問形で返したキリトに

カトラスが噛み付く。

「へえー、

そんなに小さいアバターもあるんだ。

そういえばスクワッド・ジャムでも

小さいアバターの子が優勝してたわね。」

さらに戸惑うキリトを尻目に

シノノン？は関心している。

「ところでトード。相談役ってどういう事だ？」

「何でもねえよ、嫌われ者って意味さ。」

本題に入ろう。」

「ああそうだな、それじゃあ相談役。

酒場で良いか?」

「俺はかまわねえよ。」

再び酒場に戻って少し広めの

個室に入った俺たちは軽く食事をしながら

顔合わせついでに

報復のための話し合いをしていた。

「それじゃあ改めて。

新年早々集まってくれてありがとう。

まあメールで伝えた通り、

ちよつとクソゲーマーに殺られたから復讐する。

人手が足りさんから協力しろ。」

「それって俺たちに関係あるのか…。」

呆れ顔でそう言ったキリトにトードは、

「ほー?…さて…」

お前にはいくつか『貸し』があつたなあ…」

「うぐうつ!そこを言われると痛いなあ…。」

「はあ…:…まったくアンタは…」

「当然拒否権はないぞキリト。」

「まあどつちにしる2人とも自業自得よね。」

私は降りるわ。」

そう言つて出口へ向かい始めたシノンの

元にトードが駆け寄り、何かを耳打ちする。

「なっ!?あ、アンタ汚いわよ!」

「で、どうする?」

「ぬー!っ!分かつたわよ!殺るわ!」

殺ればいいんですよ!

言つとくけど、これでアンタが約束破つたら

ただじゃおかないから！」

なんと言つて引き止めたかは

わからないが、唯一確信したのは

俺の相棒、トードは相当性格が悪いって事だ。

「ダインとかいうヤツに殺られた。知ってるか？」

「アイツ：ついにルーキー狩りまで始めたのね。」

「確か、B O Bでペイルライダーに

ショットガンで殺られたやつだよな。」

「オレは知らねえや。」

全員の反応を聞いたトードは話を続ける。

トードの性格に大きく影響された計画を

聞き終えた俺たちは、

全員の装備を確認する。まずはキリトだ。

「じゃあ俺から。」

「アンタは言わなくてもわかってるわよ。」

「ああ：、それもそうだな。」

だがシノンに遮られて

ストレージから取り出すこともなく席に座った。

「私もB O Bから変わってないわ。」

それよりアンタたちのを見せなさいよ。」

「じゃあ俺からな。」

そう言つて名乗り出たトードは、

自分の装備をストレージから取り出す。

ゴトゴト、ガチャ、

カラカラ：ファサア：といった具合に

重くて硬い順から出てきた装備を

トードは1つずつ身につけていく。

機動性重視なのか、

キリトより少し面積が広い程度の胸当て、

5.56×45mm NATO弾を使うマガジン用の

マガジンポーチと、

かなり大きめのホルスター2つが
取り付けられた

タクティカルガンベルトを腰に巻き、
ふう、と一息。

続いて一番下にあつた大きな物体を

”2つ”手に取る。

その2つのライフルは、

強化プラスチックによって産み出され

人間工学的に優れたデザインの

近未来的なフォルムを持っている。

「トード…それって」

「ああ、XM8だ。」

「正しくはXM8オートマチックライフルだろ。」

「んなことあどうでもいいんだよ。」

軽々と…まあ実際に軽いのだが、

XM8を自慢気に掲げるトードにシノンがつっこむ。

「アンタねえ…」

その銃の性能を台無しにしてんだけど。」

確かに俺もそう思う。XM8は軽量化のために

強化プラスチックを多用している。

ところがトードはドラムマガジンと

M320グレネードランチャーを取り付けたうえに

2丁持ちなんて馬鹿なことをしているのだ。

…だがな、高校の同じクラスで

俺は1年ほどヤツとともに過ごした。

個性を表すことが許される場で

ヤツの言い放つことといえは…

「シノのん、知らねえのか？」

「これぞ『俺くおりちー』だ。」

予想通りのセリフだった。
ほんつとにキャラがブレない。

「いいんじゃないのか？」

シノンもこないだ俺に2丁拳銃を
教えてくれただろ？」

そして妙に肯定的なB o B優勝者である。
キリトって素人なのか？

2丁持ちなんて狙いが定まらないし、
当たらないし、マガジン交換ができない。

唯一の利点は火力が2倍になることだけ。

だがその利点ですらハンドガンやSMG、PDWでこそ
できることであって、いくら反動が軽いとはいえ
LMGですることではない。

「まったくアンタたちは…いい？」

2丁持ちをするのは

機動力を活かして敵に接近しつつ、
確実に仕留めるための戦術なわけ。

それを機動力まるつきり無視したLMGで
やろうなんて正気とは思えないわ。」

シノンの指摘にキリトがうーんと唸る。

「…でも、相談役はSTR優先のタンクだったから
そういうのもありじゃないのか？」

「あのねえ…はあ…まあ良いわ。

でも邪魔になったら

トード、アンタを最初に狙撃するから。」

できれば今撃つても良いですよなんて物騒な事を
頭の中で考えてストローでジュースを
吸っていた俺に視線が向けられた。

「それで？」

シヨウさん、アンタのを見せてくる？

…まさかアンタまで

『俺くおりちー』なんてバカなこと

言わないわよね?」

「シヨウさんって言うなよ。

『小3』みてえじゃねえか。

それと、その脳筋と一緒にしないでくれ。」

ロマンを追い求めるガンダム馬鹿を

見る時と同じ冷たい視線を

向けられたことを不愉快に思いながら、

俺はストレージから自分の装備を

実体化させた。

俺のはいたって普通で、

ODカラーの戦闘服に黒のタクティカルパンツ、

7.62×51mm NATO弾用のマガジンポーチを

取り付けたプレートキャリアと、

ホルスターやグレネードポーチ、

5.56×45mm NATO弾用のマガジンポーチが付いた

ガンベルトだ。メインウエポンは

7.62×51mm NATO弾仕様の

LE-901-16sというAR-10系ライフルを

かなりカスタムしたもので、

1〜8倍のライフルスコープや

アングルフォアグリップ、バイポッド、

レーザーライトモジュールの

AN/PEQ-15を取り付けてある。

「普通ね。」

「うっ…」

俺はシノンの一言で妙にグサつとききたが、

そんな俺を放って次のカトラスが装備を

実体化させる。

「…驚いたわねえ。」

感嘆の声を漏らしたシノンの視線を追い、俺もカトラスの方を見ると、

カトラスの小さな体は黒…ではなく、剣道の道着を連想させる深い藍色のつなぎに包まれていて、

その上から身につけるポーチが取り外されたタクティカルチェストリグの右側には矢筒が、左側には細長く3つのポケットに区切られたマガジンポーチが装着してあった。だが1番驚くのは武装だろう。

なぜならP90と弓を持っていたからだ。いや、厳密に言えばコンパウンドボウと言うのだろうか？

機械的なその弓はハンドルとリムの間に滑車があるため、普通の弓に比べて射るのが容易なのは想像に難くない。

そしてこのコンパウンドボウの最大の特徴は『折り畳める』ことだろう。リムをハンドル側に曲げてパチンツという音がしたかと思うと、

コンパウンドボウはまるで警棒のような見た目になった。

折り畳んだコンパウンドボウを腰に取り付け、P90をスリングで背中に回すとカトラスは腕を組んでドヤ顔をキメる。

「へえ〜GGOにも弓なんてあったんだな。」

なんて名前なんだ？」

「えーっと…」

珍しい武器ということもあってか、

真っ先に聞いてきたキルトの問いに

カトラスは暫く『あー』だの『うー』だの唸って

思い出そうとして1〜2分待たせた挙句、

「知らぬ。」

全員が椅子から落ちたのは
言うまでも無いだろう。

6. 5

「クソツ、クソツ、クソツ!!」

一体どうなってやがる!？」

赤茶けた空の下、

人気の無く荒廃とした市街地のとあるコンビニで、

1人の男が聞くものの居ない悪態を付いていた。

「おい、誰か応答しろ！」

誰も居ないのか!？」

無線に問いかけても返事は返って来ない。

「ククク、久しいねえダイソ君。」

「なっ!？」

突然背後から聞こえた声に

振り向こうとした時にはもう遅すぎた。

コンビニの割れた窓の間を

音も無くすり抜けてきた矢が左肩に突き刺さり、

先端の乾電池のような物体から流れでた

青白い糸のようなスパークが全身を這い回る。

体が動かなくなり、

そのまま砂の溜まった床に倒れた。

かろうじて動く両目をクルクルと回し、

声の主を探すと、

見覚えのある黒目黒髪の美人アバターが目に入る。

「お前は…あの時のニュービーか!？」

「ニュービーとは酷いなあ。

こう見えてもALOでは

かなり名のあるプレイヤーなんだけど…

興味無いだろうしどうでもいいよね。」

「はっ、妖精の国から

やって来たファンタジー頭か。」

「あ、言っとくけど煽ってたって無駄だからね?」

美人アバターは床に転がっていた
ダインの愛銃、SG550を手に取ると
マガジンを外し、コッキングレバーを
引いて抜弾する。

念のためなのか、セクターレバーの位置を
セーフティーにすると、
ハンドガードを持って剣のように掲げた。

「そう言えばS J 2は見たかい？」

あの金髪のちびっ子が小児性愛者を
ライフルでボコるシーン。」

「お、お前まさか！」

「前からやってみたかったんだよねー、ククク…」

数分前：

俺はとあるホテルの一室のベランダから、
下に見える道路を見下ろしていた。

いや、誤解を避けるために付け足す。

とあるホテルだったであろう建物の

5階のベランダから、

とある不機嫌な女スナイパーとともに
道路を見張っていた。

まだまだ言いたいことはあるが

もう1つだけ言うと、

めっちゃくちゃ気不味い。

長くなりそうなので時を遡らずに説明すると、
なぜか第3回B o B優勝者から直々の指名を
受けた俺はこのシノンという少女、
なのかどうかは分からない女性の
スポッター兼護衛を

務めることになってしまった。

数時間にも感じられた無言の空気を
なんとかしようとして時計に目をやる。

15:36

…ここに来てからまだ10分も経っていない…。
なんとかしたいとは思うが女性、女子、
女の子に対してあまり耐性のない俺に
自分から話しかける根性など有るはずもなく、
とりあえず俺はメニユー画面からマップを開くと
位置や距離の確認と暗記をする。

「アンタねえ…」

マップの確認するのは関心するけど
無言で女子に見張り任せて

自分はメニユー画面開くってどうなのよ。」

話を初めてくれたのは嬉しいが

初っ端この毒舌は厳しい。

「…すみません。」

上下関係の厳しい運動部に入っている
という事もあってつい反射で謝罪の言葉を発するが、
どうやら会話の糸口に使ったらしくスルーされる。

「はあ…まあいいわ。」

それよりアンタはトードの事をどう思ってるのよ。」

唐突な問いに俺がまず連想したのは、

ヤツ、つまりリアルなトードが

見せてきたBLモノのネット小説だ。

「そ、そんな趣味じゃないですよ!？」

「違うわよ。そういう事じゃなくて、

リアルでどういう人間関係なのかってこと。」

「…マナー違反…」

「アンタはどうか知らないけど

私は別に気にしないわ。

どうせ組むのも今回つきりだし。

それに私だけ有名人だからって

いろいろ知られてるのも癪だから。」

「うーん…まあ、良いのかなあ…」

「いやならそれで構わないわ。」

俺は断れば再び続くであろう沈黙の苦しきより、

この女性との会話を選んだ。

「出会ったのは高校入学してから…かな。

俺って結構人見知り激しくて、

クラスで浮くのを覚悟してたんだけど

そんな時にあいつが…トードが声をかけてくれて。

そっから今に至る、て感じ。

オタク同士だけどジャンルが違うから

話が噛み合わない事も多かつたんですけど。

でも俺の話は聞いてくれるし、

理解してないところは

ちやんと聞き返して理解しようとしてくれる。

だから俺にとってトードは

親友以上…相棒みたいなもんなんですよ。」

俺は最後にシノンの顔を伺うが、

シノンは意外そうな視線を送ってくる。

「なんか…変なこと言いました?」

「違うわよ。ただ…アイツにも

いいところあるんだなって思っただけ。」

トードがこれまで一体どれだけの

悪事を働いたか知りたいがそれはさておき…

ターゲットがマップに映った。

どうやら俺が仕掛けたセンサーに

引つかかったらしい。

「12時方向に2ブロック。

右側から通りに出る。距離826m。」

「わかったわ。」

俺が通信アイテムを取り出し出して同じ事を伝えたと、
それぞれの返事が返ってくる。

「こちらショウ。」

カトラス、そっちから確認できるか？」

『あー、今見えた。5人いる。』

「武器は？」

『えーっと…』

しばらく沈黙が続き、

心配になった俺がもう一度問いかける前に
返事がきた。

『5人とも銃をもってる。』

そりゃこれは銃のゲームだから
みんな銃持っているのは当然だ。

「あっ…」

しかし俺はここでようやくこの作戦の
失態に気がついてしまった。

ALOプレイヤーは銃の知識なんて持っていない。

『もうすぐそっちからも見えるよー。』

「了解。」

カトラスから伝えられる位置情報と

マップを照らし合わせて

作戦通りに進んでいることを確認した俺は、

思わず溢れそうになった

安堵のため息を呑み込んだ。

カトラスが銃器関連に無知過ぎることは

想定外で、一時はどうなるかと思つたが、

スクリーンショットを送ってくるという

いかにもゲーム的な考え方を

提案したキリトのおかげでなんとかなった。

「うーん…武器は裸のUMP―45とUZI、

これは…M14…いやM1Aか？

それとスコープ付きのAR―15系とSG550。

脅威度的にはこの高倍率スコープ付きのSG550が

1番なんだけど…」

「それがどうかしたの？」

「ダインなんだよなあ…」

俺はもう一度マップに目を落とす。

交差点を見下ろす西のビルにカトラス。

ダインたちが通つてる東の通りの建物にキリト。

北に向かう道路にトード。

そして交差点から南に

800mほど離れたビルに俺とシノン。

俺は通信アイテムの回線を

全員に聞こえるよう調整すると、指示を出す。

「初弾を撃つのはカトラスだ。

スモークチップを

撃ち込んで後方のキリトに気づかせろ。

すかさずキリトが突っ込んで

交差点に追いたてたところを

トードが制圧射撃で南側以外の退路を潰す。

それと…キリトに当てるなよ?」

『ああ、わかってる。

ダインを生け捕りにするための作戦だ。

お前ら…絶対に殺すなよ。

奴と遊ぶのはおれだからなあ…』

『うわあ…』

「私は別にどうでもいいんだけど。」

ドン引きするキリトに続いて隣でシノンが

愚痴とも聞こえるそれを呟いたが、

システムには聞こえない音量と

判断されたのか、無線機から聞こえると

思ったトードの反応は無い。

俺が無言で双眼鏡を覗き込むと

すぐに交差点の角で煙が立ち始め、

続いていくつもの銃声が聞こえてくる。

「トード、射撃用意。

カトラスは爆薬チップを準備。

ターゲットが西に逃げようとしたら阻止。」

『あいよ。』『はいはい。』

双眼鏡に映る交差点の真ん中で、

ダインたちのスコードロンが

横転したトレーラーを盾に防衛線を張っている。

どうやらキリトに火力を集中させているらしく、

キリトは交差点の角から動けていない。

「トード、そっちから狙ってるか?」

『いや、トレーラーが邪魔だ。』

「カトラスは?」

『下に同じくー。』

『誰が下だこん野郎っ！弾幕喰らわすぞー！』

『だって実際トードはオレより

低いところに居るし。』

「はいはい喧嘩は後でな。

こつちから狙撃するからその隙にトードは

プラズマグレネードを投げ込め。

タイマーは10分くらい。

キリトはターゲットが後退し始めたら

前進してプラズマグレネードの

タイマーを止めて回収。」

俺は2人を宥めて新たな指示を出す。

『あー…えつと…』

それはちよつと遠慮させて貰ってもいいかな…。』

銃声と一緒にやりたくないオーラ全開の

キリトボイスが聞こえてくる。

「なんかまずいのか？」

『いや、そういうわけじゃないんだ。

ただ…プラズマグレネードとは

あんまりいい思い出が無くて…』

なぜか気まずそうなシノンの表情を察するに、

何かあったのだろうか。

『おやおや？』

流星のハーレム王も女神との心中はトラウマか？』

「はいはい、いじるのも後でな。

そんなじゃあカトラス。

トードが投げ込んだプラズマグレネードは

ターゲットが交差点を出たと同時に破壊してくれ。」

『りょうかーい。』

俺は双眼鏡から目を離し、シノンの方を向く。

さつきから氷のように表情を変えてないが、

右の人差し指は感覚を

確かめるように曲げ伸ばしを繰り返している。

「シノン、ダイン以外の誰か1人。狙えるか？」

「わかったわ。あの機関銃手から殺る。」

「了解。」

…ん？ダインのスコードロンに

LMG持ちなんて居たか？

「おいちよつと待て。」

気持ちとは分からんでもないが後にしてくれ。」

銃口の向きからして明らかに

トードを狙っている事を察知した俺は

スコープを手で隠して狙撃を阻止すると、

シノンをなんとか宥める。

「…ふんっ、ダインの左にいるアタッカー。」

「りよ、了解。距離は…およそ810m、

風は…左から右へ0.5m。」

「サークルがあるから大丈夫よ。」

それより音大きいから気をつけて。」

「わかった。」

シノンが片目を閉じ、

呼吸がゆっくりになっていく。

俺はもう一度双眼鏡を覗き込み、

シノンに…冥界の女神に

選ばれてしまった不運な男を見つめたその刹那、

耳をつんざく爆音とともに

床から突き上げる衝撃が俺を襲い、

双眼鏡に映る男を音速を超える金属の矢が貫き、

上半身がトレーラーに叩きつけられて

ポリゴンの破片と化した。

安全と思っていた遮蔽物の裏で

目の前の仲間を撃ち抜かれたダインは
すでに軽いパニック状態だ。

そして間を置かずにとソフトボールサイズの
プラズマグレネードがボタンを

赤く点滅させながらトレーラーの裏に落ちた。

敵の射界に入っているうえに

グレネードを投げ込まれば、

普通の反応はその場から逃げるか

死を決意して目を閉じるかのどちらかだ。

そしてダインを含む生き残り4名は

全員が前者だった。

転がるようにトレーラーから離れ、

まっすぐ南の通り

：つまり俺とシノンが居る方向へと向かってくる。

そして交差点から出た直後、

カトラスが指示通りに

プラズマグレネードに矢を射て誘爆させた。

もうもうと舞い上がる土煙を背景に

ダイン以下4名は走り続けるが、

背後から彼らの体をいくつものバレットラインが

照らし、続いて銃弾の雨が襲いかかる。

1人が背中に気持ち悪いほどの

赤い点を光らせながら

ポリゴンの破片となつて砕け散る。

『シヨウ、リロードするから後はそつちで頼む。』

「了解。

シノン、もう一度頼む。」

シノンは何も言わずに

スコープを覗き込むと呼吸を整え、

トリガーに指をかけた。

最初の狙撃から時間が経ち、バレットラインは映らない。

先ほどと同じように床から突き上げるような衝撃と爆音が俺に襲い掛かり、

再びターゲットの1人を

アイテムドロップと引き換えに

グロツケンへと送り返す。

「残り2人だ。」

「シヨウ、アンタが殺りなさいよ。」

「いや、俺じゃ当てれないよ。」

「やってみないと分からないじゃない。」

それに私が今撃つとバレットラインが

映っちゃやし。」

言い返す言葉も思いつかない俺は

しぶしぶ隣に置いておいた愛銃の

LE—901—16sの7.62×51mm NATO弾仕様を

引き寄せ、バイポッドを立てた。

スコープを覗き込み、トリガーに指をかける。

スコープの中心に現れた緑色の円は

かなりの速度で拡大と縮小を繰り返している。

「力を抜いて深呼吸して。」

呼吸をゆっくり：そう、そんな感じ。」

シノンのサポートを受けつつ照準を合わせる。

スコープのバレットサークルの向こうに

映る男の顔は恐怖に歪んでいる。

大丈夫だ。

これはゲーム：殺して殺されてを

繰り返さないと成り立たないんだ。

テレビ画面でやってたゲームと同じだ：

ズダンッ

1発の銃声が鳴り、

スコープに捉えていた男の額に赤い点がつく。

男がその場に倒れ込み、

ポリゴンの破片となつて消えた。残りはダインだけ。

「アンタこれが初めてなの？」

「まあ…いちおうチュートリアルは受けました。」

「それにしても…」

言葉を詰まらせたシノンに聞き返そうとしたが、

冷たくあしらわれそうな予感がしたので

俺はスコープに目を移す。

1人になつたダインは脇目もふらずに

まっすぐ南に走っている。

このままでは逃げられそうだ。

俺はダインの前方に照準を合わせ、

トリガーに指をかけた。

真っ赤なバレットラインが伸びていき、

ダインの足元に突き刺さる。

ダインがそれをジャンプで避けた瞬間、

トリガーを引く。銃弾が地面を抉る。

体勢を立て直したダインが

こつちに銃を向けようとするが、

それより先に俺が第2射を送り込み、”わざと”外す。

反撃することすら叶わなかつたダインは

ビルに向かって走り始めた。

俺はそのまま至近弾を送り続け、ビルに追い込む。

ダインがビジネスホテルの

一階部分の半分を占めるコンビニに

入って行ったことを確認すると、

俺はトードに連絡する。

トードはわかったと一言返して無線を俺とのプライベートチャンネルに変えてコンビニに入って行った。

そして数秒もしないうちに

全身を真っ黒な装備に身を包んだ

アバターが光剣を片手に

コンビニへ向かって走ってきた。

「トード、キリトがそっちに向かっている。」

『誰も近づけるな。』

「わかった。」

俺はスコープの中心にキリトを捉えると、

その3mほど先を狙って引き金を引いた。

静かになった市街地にもう一度銃声が響き、

キリトの前方でアスファルトの地面が爆ぜた。

さすがBOB優勝者だ。

自分が狙われた事を瞬時に悟り、

近くの車の裏に飛び込んだ。

そして俺のこめかみに冷たい金属が触れる。

「…アンタ一体どういうつもり？」

「…アンタ一体どういうつもり？」

俺は左のこめかみに突きつけられた

M P 7を横目で確認しつつ、

左手に握る円筒形の武器の感触を確かめる。

「答えなさい！」

「どうしてキリトを撃つ…クツ!？」

シノンが俺を問い詰めようと声を荒げたが、

俺はシノンが最後まで言い終わるのを

待たずに左手に握っていた武器を使った。

俺が左肘でM P 7の銃口を跳ね上げ、

光剣でシノンの肘から先を切り落とす。

赤い光が俺とシノンの間を走り、

ガシャツと音を立ててM P 7が床に落ち、

シノンの腕がポリゴンの破片となって消える。

シノンが立ち上がった

バックステップで間合いを取る間に

俺も立ち上がり、

ホルスターからH K 45を取り出した。

右腕の無い少女がまるで追い詰められた猫のように

犬歯を剥き出して敵意を表す。

『(シノン！大丈夫か!?)』

衝撃で床に落ちたシノンの無線機から

キリトの声が聞こえる。

「私は良いから早く行って！」

『(わかった!)』

ビル風が吹き込み始め、

再び訪れた束の間の静寂を消し去る。

俺は光剣の刃を消すと、

光剣とH K 45をそれぞれのホルスターにおさめた。

「…どうして?」

「別にシノンに恨みはないし、

丸腰なのに殺すほど俺は腐ってない。」

仲間を撃つのはどうなのかと

言われればそれで終わりだが、

キリトもトードと止めるために

光剣を手に走っていたわけだし、

そこはお互い様だ。

「そうじゃないわよ。どうしてあなたはトードに?」

例えば仮想世界の中でも

やって良いことと悪いことがあるはずよ!」

「なんだ…そういうことか。」

これはあいつのためじゃない。

俺自身に対する意思表示のためだ。

だから俺は今回あいつのイエスマンでいる。

ストツパーは…ほらな。

やっぱり俺たちの出る幕じゃない。」

俺は端末からマップを呼び出し、

シノンにも見えるように向きを変える。

マップの上でカトラスを示す点が

猛スピードでトードの元へ向かっている。

俺は再び移動を始めようと

タイミングを見計らっているキリトを

もう一度牽制するために

自分のライフルを持ち上げた時だった。

シノンが俺との間合いを詰めようと走って来る。

俺は咄嗟にライフルを捨て、

腰のホルスターに手を伸ばすが

次の瞬間、シノンの姿が視界から消え、

頭上で金属が軋む音が聞こえたが、

シノンの左腕が放った一撃の方が

俺が音の方向を向くよりも早かった。

よろめき尻餅をついた俺に

追い討ちをかけるように首を絞められる。

「だとしてもー」

アンタなんかキリトは撃たせないッ！」

抵抗しようと両手で

首を絞めているシノンの左腕を引っ張るが、

10kg以上の重さがある対物ライフルを

使いこなす筋力は凄まじい。

俺は腕の力をフルに使うがビクともしなかった。

そして10秒もしないうちに

窒息認定が始まり、

HPがジワリジワリと

死へのカウントダウンのように減り始めた。

俺は腕力での勝負を諦め、

腰にぶら下がるHK45に手を伸ばし

ホルスターから抜くが、

背中につかまっっているシノンも

それには気づいたようで、足で蹴り落とされる。

HK45はそのまま床を滑っていき、

大昔に崩れたという設定であろう大穴から

落ちて行った。

「ぐっ…」

体を揺らしたり壁にぶつかけたりと

思いつく限りの抵抗はしてみるが、

シノンの華奢な腕は離れない。

HPが残り5割を切ったとき、

HK45が落ちて行った大穴が

再び目に入り、ある事を思いつく。

できればやりたく無いが、

今回ばかりはしようがない。万策尽きた。

俺はその大穴めがけて走り出した。

「なっ!？」

背中のシノンも

何をするか気づいたらしいが、

これで間合いを取り直したとしても

ステータスや経験などの

いろんな要素で格闘戦に勝つ見込みはない。

俺は逃げられないように

シノンの左腕をしつかりと両手で掴んで

そのまま何も無い空間に飛び出した。

空中で俺の首を絞めるシノンの左腕の力が緩み、

HPの減少が止まるが、

数秒後には地面に叩きつけられてリスポーンだ。

俺は無線機のスイッチを入れ、

トードに状況を伝えるが、

「お姫様がそっちに行つた。」

良い加減目を覚m：」

最後まで言い切る前に頭から地面に突っ込み、

ガツンという衝撃の後に

待機スペースに転送された。

リスポーンしますか？

Yes・No

— LOG ORDER —

非日常の中の日常

9

「んがああああああああ!!」

「ど、どうしたシヨウ?」

「課題…終わってない…」

「はあ? バカじゃねえのお前。」

「答え写せよ。」

などとまあ長期休業期間明けの

学生におそらくありがちであろうと

思いたい会話をしている今日は2026年1月12日だ。

そしてこの会話は昼休みが

始まると同時に開始された。

「まああと英語のワークだけだし

あと2日で終わるとして…」

「として?」

「お前の隣の可愛い系男子は誰だ?」

俺が弁当を開く手を止めて視線を向けた彼は、

袖がかなり余るぶかぶかの制服に

眠そうな顔でスマホをいじりながら

弁当を食べている。

もし俺がそんなことしたら

経路不明の情報網で母さんの耳に入って

ピンタを頂戴することになるだろう。

…確か灯俊はBL読んでたけど…

リアルでもそんなことすんのか?

いやいやいやいや、

コイツと半年過ごしてきたが

ケツを狙われるようなことは一度も無かった。

たぶん大丈夫なはずだ…。

「ああ、こいつは俺の幼馴染の霧島 葵だ。」

「葵って…なんか

女子みたいな名前だな…」

「ん？オレいちおう女子なんだけど。」

数秒の沈黙を挟んで俺は葵の服装を見る。

上は男女共通のブレザーで下は女子ならスカート、

男子ならズボンなのだが葵の下はズボンだ。

「ははは…またまたあ…」冗談を」

「シヨウ、はじめに言っとくけど

こいつは性同一性障害だ。

っていうかお前知らねえのか？

ウチの学校は性同一性障害者は

制服をどっちか選んでいいんだぜ。」

「へえー知らなかったなあ…」

とまあもう一度葵の方を見るわけだが、

「…どうしてここに？」

「ん？ああしまったあ…」

シヨウには言ってなかったな。」

「な、何を？」

「ほら今日は部活が休みだって言ってたじゃん？」

「お、おう。」

「放課後にマックでオフ会した後

そのままGGOにインするんだよ。」

「それとこの…霧島さん？が

どう繋がってくるんだ？」

「あれ？もしかしてシヨウは

オレが誰かわかんない？」

そう言ってきた霧島さんを見て

俺は少し記憶の中を探るが、

ベッドに横たわって魔法の言葉を呟く。

「「リンク・スタート！」」

目を開けるとそこは

もう何度目かのSBCグロッケン。

相変わらずの赤茶けた空を見ながら

俺は思ったことを口に出す。

「うーん…なんかこう…夢が無いよな。」

「それでもってお前にはロマンが無いと。」

俺は声の方向に振り返った。

そこには予想通りに女っぽい男が立っており、

腕を組みながら待ちくたびれたように

つま先で地面をリズムよく蹴っている。

「うるせえなあ。独り言だ独り言ー」

「そんなのいいから早く行こーぜ。」

いつも通り高めのテンションのカトラスに

急かされながら俺たち3人は

NPCショップで消耗品を買い揃えて

フィールドマップの印へと向かい、

目的地にたどり着いた。

そこにはアメリカの高級住宅地を

思わせる家々が並び、広い庭には

かつての住人が使っていたであろう

BBQセットや子ども用の遊具が散在している。

ここがGGOということを忘れそうになるが、

家に突っ込んだままの自動車や、

あちこちに停車して放置されている

ハンヴィーがなかなかいい雰囲気を出している。

宙に浮かぶクエスト名を見上げたカトラスが

英語表記のクエスト名を読み上げた。

「ふおーごとてんばとれふいえるど?」

「カトラス…それ本気で言ってるのか?」

「なんか違う?」

「ああ、大きく違う。Forgotten Battlefield、

意味は『忘れられし戦場』。」

「まあいいからいいから。」

早く行こーぜ。」

カトラスの英語力に少々不安を覚えつつも、

俺たちは目の前に現れた

メニユーウインドウの説明文を読み上げる。

最終戦争が終わってなおも

稼働し続ける戦闘ドローンと

それを制御する武装勢力を全て排除せよ。

俺は2人と目配せして

メニユーウインドウからクエストの承諾を選んだ。

「よし…行くろうか。」

クエストを受注した俺たちは、夕方になって陽が傾き始めた薄暗い住宅街を進んでいた。

「カトラス、何か居るか?」

「んー…今の所は何も。」

普段は…いや、語弊があるな。

リアルでは四六時中眠そうなカトラスが目凝らして索敵して居る。

今の所は反応が無いと言うから何も居ないんだろうけど、

もしも…なんてことが起こりうるのがVRゲームだとトードに聞いたことのある俺は、

ライフルを腰だめの状態で構えて家々の窓を警戒する。

ちなみに3人のステータスだが、

俺（シヨウ）はDEX（器用さ）重視のマークスマン。

スキルは銃の改造が可能になるガンスミスとトラップの設置、解除、探知関連を進めている。

カトラスはAGI（敏捷性）重視で

スキルは索敵スキルや近接格闘術のスキルを進めているらしい。さしずめアサシンとでも言おうか。

得物もその名に恥じず、音の小さい、もしくは無音の物が多い。

そしてトードはカトラスと一緒に

ALOからのコンバートしてきたSTR重視のガンナーだ。

LMGの両手持ちなんて馬鹿なことをしているが、

弾代が気になり始めたのか

最近ピンチのときにしか両手持ちはしない。

スキルは「トゥーハンド」とかいうのを進めているらしい。

本人曰く、2丁持ち用のスキルだとか。

「ストップ。」

先頭でポイントマンを勤めるカトラスが何かを見つけたのか、P9
0を構える。

トードもそれにならってハンヴィーを盾にカトラスを援護できる
ようXM8を構え、

俺は後方警戒のために2人の反対側を向く。

「どうしたカトラス？全裸の美女でも居たか？」

「トードのは無視。何か居たのか？」

「なんか居る。…道路を渡ってる。」

「どんな見た目だ？」

いつも通りキャラのブレないトードが冗談を飛ばすが一蹴して質
問する。

「うーん…モノアイ付きのミニせんしゃ？」

「は？」

モノアイという聞きなれない単語が

入ったこともあって俺は理解するのに時間がかかるが、

トードの方は即理解したようだった。

「あー、なるほどねえ。わかりやすい。」

「ちよつとトード、後方警戒交代しろ。」

「あいよー。」

トードと場所を交代し、カトラスの言う『モノアイ付きのミニせん
しゃ』なるものを探す。

だが答えはすぐに見つかった。

俺の視線の先で道路を横断するそれはラジコン戦車のような見た
目で、

砲塔部分にM240B汎用機関銃と

M203グレネードランチャー4丁が搭載され、

不気味に赤く光るセンサーカメラが周囲を警戒している。

「なんかかわいいなあ。」

「いや、あれはやばいぞ。正面からじゃ勝てない。」

「どしどし？」

7. 62×51mm NATO弾を毎分950発、

40×43mm擲弾その他各種弾頭を4発撃つことができるこの殺人マシン。

現実世界でこいつに遭遇したらビビって若かりし頃の家康公よろしく

脱糞しながら逃亡するレベルだ。

だが幸いなことにこのGGO内では一切の排泄が行われない。

とにかく火力が違うんだ。」

「だいじょうぶだつてえー」

「トード、本当にか？」

「ああ、ねずみっ娘から買った情報だ。

それとあいつのセンサーは探知範囲が狭いらしいぞ。」

「なるほど、それなら…カトラスが囷で、

トードと俺が支援。俺は位置を変える。」

「ラジャッー！」

「まあ王道だな。」

車の陰にトードとカトラスを残して道路から出ると、

左側の白い民家のドアに張り付く。

視界の隅にHMD（ヘッドマウントディスプレイ）のように

映る各種情報の中にはクエストの制限時間と

敵の数が表示されている。

戦闘ドローン 0/1

歩兵

0/18

つまり一個分隊ほどの戦力がこの居住区に隠れている。

もちろん俺がこれから入るこの民家も例外では無いはずだ。

俺は周囲を警戒しつつもメニュー画面を開き、

得物のLE—901—16sの5.56×45mmNATO弾仕

様

アッパーレシーバーをストレージから取り出した。

トップレールにはACOGサイト、

ハンドガードには7.62mm用レシーバーと同じ

AN／PEQ—15というレーザーライトモジュールや、

あの『モノアイ付きのミニせんしゃ』こと

戦闘ドローンにも搭載されているM203グレネードランチャーだ。

素早くマガジンを外して抜弾し、

テイクダウンして7・62×51mm NATO弾仕様のアッパーレシーバーと交換、

5・56mm用のアダプターを装着して組み立て直す。

するとききまではバトルライフルだったものが

グレネードランチャー付きのアサルトライフルに変わった。

もちろんこんなことを戦場でやるのは自殺行為だし、

同じGGOプレイヤーからも愚考扱いされかねないが、

俺が大金叩いてまでこんなマイナー武器を買った理由は、

他でもない簡単な口径変更が可能だからだ。

SCARシリーズやMASADAを選ぶという手段もあったが、

敢えて言わせてもらおうなら、そう：ロマンだ。

俺は7・62×51mm NATO弾仕様のアッパーレシーバーをストレージに納め、

続いてサプレッサーを実体化させて銃口に取り付けた。

GGOでのサプレッサーは銃声を抑え込んだり、

マズルフラッシュが見えなくなる効果がある一方で

威力減衰や射程距離の短縮などがあり、

サプレッサー自体も高価で劣化する。

スナイパーとして俺が勝手に尊敬しているシノンも

『アメリカットが多いから使ってない』の一言だった。

要するに消耗品なのだが、

親父の仕事上、知人が多い俺にはお年玉という武器がある。

まあそんな夢もロマンもないリアルの話はここまでにしておく。

窓の汚れを擦って室内を確認すると、

案の定、敵兵が4人居て、カーソルの色は赤だ。

リビングのソファアークでくつろいでいる敵兵に

俺は窓越しにライフルを向けて、狙いを定めると引き金を引いた。

シユパンツという音とともにNPCの敵兵のこめかみに赤い被弾エフェクトが浮かび崩れ落ちる。

すぐさま2人目に照準を合わせて今度は胸にフルオートで5発撃ち込む。

赤いバレットラインに気づいた敵兵がこちらに銃を向けるが、ここで敵兵に銃声を出されたらサプレッサーを使った意味がない。俺は大して狙わずにマガジンに残った残弾を全て室内にばら撒いた。

割れてポリゴンとなって消えた窓ガラスの向こうに、クエスト中に死亡判定を受けたことを意味する

【Dead】のマーカー4つを確認したおれは、

軋むドアをゆっくりと開けて中に入った。中は薄暗く埃っぽい。

見ているだけで鼻炎が悪化しそうな室内は、

昔人気だったホラーゲームのバイオハザードを連想する。

最近、アミューズファイア用の新作が発表されたらしく、興味を惹かれるが、銃を持ったNPC相手に背中に冷たいものを感じるくらいだ。

ホラーゲームなんてやったら心臓が口から飛び出す。

臆病な俺の性格をアミューズファイアもしっかり受信しているようで、ACOGサイトに表示されるバレットサークルもかなり速い速度で拡大と収縮を繰り返している。

もしもそんな俺がホラーゲームをしたらアミューズファイアの安全装置で

シャットダウンされる前に心臓発作を起こしかねない。

「アミューズファイア使って死んだらシャレになんねえぞ…。」

『シヨウ、まだか?』

「ひっ!」

突然聞こえたトードの声に軽く声が裏返り、

必要以上に自分が緊張していると悟った俺は何度か深呼吸して通信アイテムのボタンを押す。

「あ、あと3分。」

安全確認してトラップ仕掛けるから。」
『あいよ。』

民家のクリアリングを終え、

出入り口と一階に続く階段にトラップを仕掛けた俺は、

民家の二階で再び得物のLE-901-16sの

アッパレシーバーを再び7・62×51mm NATO弾仕様に交換して

ハンヴィーの陰で待機する2人に連絡した。

「トード、カトラス、こっちは配置についての。初めていいぞ。」

無線機から手を離してスコープを覗いた俺の視界の中で、

藍色の小さな影が戦闘ドローンの前に躍り出た。

『モノアイ付きミニ戦車』ことソイツは、

探知圏内に侵入したカトラスに

7・62×51mm NATO弾を浴びせるべくターレットを回転させるが、

ターレットが側面を見せた瞬間、

トードの持つXM8から大量の5・56×45mm NATO弾が叩きつけられた。

火花を散らしながら今度はトードを狙おうとドローンが

ターレットを回転させるが、

そこへ一度は探知圏外に逃れたカトラスが戻って来て、

至近距離から爆薬チップを搭載した矢をターレットの根元に撃ち込んだ。

カトラスがドローンから離れて数秒後、

ボンツという音とともにドローンがその動きを止めてポリゴンのカケラと化した。

ほんの十数秒の間の出来事だった。

だがすこし派手すぎたようで、

道路の左右に立ち並ぶ家々のドアが開いて10人近い兵士が溢れ出て来る。

「カトラス、トード、敵が10人以上出て来たぞ。」

『カトラスに任せた。』

俺の報告を聞いたトードは無線にそう答えて、ハンヴィーのタイヤに背を預ける。

「お、おいつ!？」

思わずそう叫んだ俺は、

やる気の失せたトードに変わってカトラスの援護をするべく攻撃の準備が整い始めた敵にライフルを向けるが、どうやらその必要は無さそうだった。

AGI型プレイヤーのカトラスは文字通り目にも留まらぬ速さで敵の構築した防衛線の中央を突破すると、手にするコンパウンドボウですぐ左にいた敵の頭を射抜いた。

恐怖を感じないNPCの敵はためらいもなく頭に矢が刺さった仲間ごとカトラスをバレットラインの中に収めるがそれも一瞬で、

銃弾が撃ち抜いたのは死体とアスファルトだけだった。

俺は視界の中から消えたカトラスを探すか、

スコープを通して見えたのは爆散する2人分のポリゴンだった。

「カトラス!?!無事かっ!？」

俺が無線で問いかけた刹那、

俺の頬をペインアブソーバーで抑制された火傷のような痛みが遅い、

被弾エフェクトが生まれて血飛沫のようにポリゴンが飛んで

HPのゲージがほんの僅かに減った。

咄嗟に身を屈めた俺は、

部屋の壁に矢が突き刺さっているのを目にする。

『あーシヨウ、あいつは別に心配しなくていいぞ?』

心配されるのが嫌いらしい。』

「たった今、身をもってそれを知ったよ…。」

こうしてカトラスの怒りのツボを一つ学んだ俺は、視界の端に映るクエスト情報を確認する。

戦闘ドローン 1 / 1
歩兵 12 / 18

俺が倒した4人を除くといつの間にか8人も殺していた。頭にふと思いついた「戦闘狂」という言葉を口にしない方がいいことを充分理解している俺はもう一度窓から外を眺めた。

住宅街のあちこちからバレットラインが

カトラスめがけて伸びてきては、

アスファルトやハンヴィーのボディに弾かれる。

銃を撃ちまくる敵兵の足元にスライディングしながら

背中に吊るしていたP90の5.7mm弾を

潜り抜けるアーチの天井にお見舞いして通り抜ける。

股間を抑えて爆散する敵兵を背景に

高く跳び上がったカトラスの次のターゲットに選ばれた男は、

カトラスのAGIをフル活用して

振り下ろされたナイフで目刺しにされる。

ナイフを敵兵の目玉に突き刺したままで再び走り出したカトラスは

P90を背中に回して今度は矢筒に手を伸ばす。

ハンヴィーを背に銃を向けてくる敵兵2人組の1人に矢を放つとジャンプして、

パルクールのウォールランの要領でもう1人の頭に蹴りを入れた。

AGI特化したカトラスの足は異常な速さで

敵兵の顎を捉え、首をあらぬ方向へ回転させる。

ハリウッド映画さながらのアクションが展開されている一方で、

俺から一番近いハンヴィーの影では

トードがタイヤにもたれかかって、

どこから取り出したのかわからない瓶入りコーラの栓をフォトンソードで焼き切っている。

…正直言って反応に困る。

普通ならチームのメンバー1人に

タゲを取らせ続けるのは有り得ないというか…

間違っているのだが、

当のカトラス本人は敵を次々と葬っていくし、

トードはいつの間にかティータイムを楽しんでいる。

しかもクエストエリアで。

これだけの余裕はどこから生まれるのか…

そして奏功しているうちにクエスト情報の歩兵の欄が

18/18となって頭上に【Congratulation】の文字が

浮かび上がった。

『ふうー終わった終わったー。』

『カトラスー、なんかドロップしたか?』

「トード、お前なんかしたのか?」

『情報提供、道案内、後方警戒。』

あー…そんなやつだったよなあこいつは…

「それじゃあ…」

今日のドロップアイテムの仕分けと

反省会、始めまーす…。」

「おぉーっ!!」「いえーい」

とまあ、こんな感じで今回のクエストの

反省会をいつもの酒場の個室で開いているわけだが、
ちびっ子1人を除いて

テンション低めの理由は現在時刻にある。

ちなみに言っておくと、ただいま01:21だ。

…正直言っただけ。

「それじゃあドロップしたアイテムを

全部実体化させてくれ。」

俺は効くかどうかは不明だが眠気覚ましに

注文したコーヒーを口にする。

コーヒーはもちろん微糖だ。

ブラックを飲んで『美味しい』なんて言えるほど

大人じゃない。

コップを置いてメニュー画面を開いた俺は、

アイテムの欄からドロップアイテムを選択し、

<一括オブジェクト化>と

書いてあるボタンをタップする。

ゴトガチャカラカランと様々な重量の金属の塊が

テーブルの上に積み重なった。

「おぉー!」

内訳をざっと言うと、

AK12の5.56mm NATO弾仕様が2丁、

RGO手榴弾が3つ、

5.56×45mm NATO弾の30発セットが3つ。

他にもM92Fやスカーフ、

AK74：と4人分のドロップにしては
かなりの数だったが、

残念なことにSTR極振りではない

俺のステータスだと、

夜戦装備やら予備弾薬やらを

大量に詰めた俺のストレージに

全部を収納することはできなかった。

そのため、戦闘が終わった後のカトラスが

参加して長引き始めたトードのお茶会の合間に

メニュー画面から攻略サイトを検索し、

もつとも価値のあったAK12を頂戴したわけである。

「それじゃあ…次はトード。」

「何もねえよ?」

「は?」

「だから、何も持って帰ってない。」

それが当たり前だとしても言う様に

スツカラカンのストレージの

アイテム欄を見せたトードは

注文していたコーラを一口。

「お前一体何してたんだ?」

「ナニってお茶会?」

「軽く下ネタ含むな。」

そんなやりとりをしながら俺はふと思い出す。

カトラスもお茶会に参加していた事を。

「そしてカトラス。」

「にゅ?」

突然話を振られて驚いた素振りを見せつつも、

口にくわえたストローから吸い上げる

味覚再生エンジンで再現された

果汁100%オレンジジュースを味わうのをやめない。

「何か持って帰って来たよな?」

「ああ、そういうことね。

だいじょーぶだいじょーぶ!」

カトラスはそういつて

メニュー画面を何度かタップする。

するとカトラスの頭で光の粒子が集まり始め、

三角形の物体を2つ形作ってオブジェクト化された。

「これでぜんぶっ…かわいいーだろ?」

「うん…泣かされたいと?」

俺の口から思わず方言が飛び出すほどの

そのドロップアイテムは、

誰が予想したであろうネコミミだったのだ。

「あつ、え、いや、

だ、だってアイテム拾うには

ストレージに空きがねーし、

どれが価値あるかわかんねーし…」

どうやら俺のアミュスフィアに

俺のイラついた感情が拾われ、

アバターの顔に再現されたらしく、

カトラスが慌てて弁解を始める。

「で、なぜネコミミ?」

「よくぞ聞いた!」

そしてこの切り替えの速さである。

大変おめでたい脳みそをお持ちのようだ。

「なんか索敵ナンチャラが

強化されるらしいぞ♪」

「まあそっちの女擬きよりマシか。」

「まあまあ、いいじゃないいいじゃない。」

他人事のように言うトードは

新しく注文したフライドポテトをパクリ。

「お前が言うな。って言うかどうすんだよ。

今回のクエスト報酬は3000クレジット。

3人で割ると1人あたり1000クレジット。
これじゃあ弾代だけで赤字だぞ?」

頭を抱える俺の隣で

カトラスがトードのフライドポテトをパクリ。

「まあ、別に課金した分がまだあるんだし

しばらくは大丈夫だろ。」

右手にコーラを持って左手でメニュー画面を開き、
新しく料理を注文しながらトードがそう提案する。

俺は眠気が強くなって来たこともあつてか、

そうしようと同じ同意の意を口にして

コーヒーを一気に飲み干すと、

トードと同じ様にメニュー画面を開き、

バーガーやらフライドポテトやらを

まとめて注文する。

俺がメニュー画面を閉じるよりも早く
注文した品がテーブルの中央の穴から

跳び上がるように出てきた。

俺は皿に手を伸ばすが、

それよりも速くカトラスの手が伸びてきて、

フライドポテトの載った皿を攫っていく。

「いただきっ!」

「カトラス、

爆薬チップの製作費1割増しな。」

「そりゃあんまりだあっ!」

数日後、俺たち3人はトードが仕入れたクエスト情報をもとに、グロツケンを遠く離れた熱帯雨林を訪れていた。

「うう〜あちい〜…」

オレもう帰りたい。」

確かに暑い。

しかも蒸し暑い。

例えるなら：剣道の防具をつけてサウナに入ったようなかんじだ。まあ分かりづらい例えだが、簡単にわかってもらえる暑さじゃ無いことだけ理解してもらえればそれで良い。

暑さのあまり、

俺も装備から戦闘服を解除して

ポロシャツにし、

頭にチクチクと当たる枝を避けるためにブルーニーハットを被っている。

プレートキャリアは流石に外してないが、俺の肌から噴き出しては

ポリゴンのかけらと

なって消えていく汗は止まる気配がない。

「あー俺ちよつと脱ぐ。」

俺の前を歩くトードが立ち止まり、

おもむろに胸当てを外すと

コンバットシャツを脱ぎ始める。

ここだけをトードが男という前提で読めば
何の変哲も無いことだろう。
だが思い出して欲しい。

こいつのアバターはM9000番系。
つまり外見だけは『超・絶』美女なのだ。
俺の心情を察して欲しい。

「バカっ!?おまつ……」

慌てて目を逸らす俺にトードは
何のことやらといった雰囲気だ。

「どしたの?」

「…じ、自分の外見考えろ…。」

「ん?」

…あ…わ、悪いな…」

シャツをストレージにしまって
胸当てを付け直すトードだが、
なにせ見た目が女だから
たいへんエロく見えてしまう。

「わぁートードが

エッチいかっこしてるー♪」

と、列の先頭から囃し立てるカトラスだが、
あいつも人のことを言えたもんじゃ無い。
つなぎの上を脱いで

タンクトップ姿になっているカトラスを
見て俺は頭を抱える。

普段の俺ならここで

何かしらガツンと言うのだが、
こんなだらしな服装をしていて

強いから言いづらい。

「男の部屋で下着姿になる痴女は

黙ってようか。」

と、トードが。

「なあお二人さん？」

自分のアバター考えような？

こっちから見たら

すっげえ滑稽なんだけど。」

「とか言って自分の興奮を誤魔化すシヨウ。」

ニタニタしながら

言ってくるトード。

「なんだ？」

シヨウもオレの下着姿を見たいのか？」

そして便乗するカトラス。

なんかもうわかってきた：

俺がツツコミ役か：

「なあなあシヨウ。」

リアルのおレにする？アバターのオレにする？

それともりよ・う・ほ・う？」

「やかましい。」

俺はお前ら2人に女を感じるほど飢えてねえ。」

NPCと戦う前に

色気を使ってくる仲間との戦いで

精神的に消耗したが、

奏功しているうちに

目的の集落の南側にある

入り口近くまでたどり着いた。

「こっからどーすんの？」

「どうするって…」

まずは敵の情報収集に…」

「んじゃ、シヨウ。」

あとは任せた。」

そう言つてさっそくストレージを

開いてお茶会の準備を始めるトードに

しれっと便乗するカトラス。

なんだか俺だけが

はぶられているように感じる件。

「どうしてそうなるんだよ。」

「だってシヨウは《スカウト》じゃん。」

「うっ…」

そう言われると言い返せないが、

わざわざハモらせる事ないじゃんか…

なんてことを思つても口に出さずに

俺はストレージから

タイガーストライプの迷彩服と

ハーフギリースーツを装備すると、

無線機をチエックして

集落を見渡せる高台まで

屈んで移動する。

見晴らしのいい場所を探して

結局集落の西側まで行つた俺は、

ストレージから双眼鏡を取り出すと

敵の数や装備を確認する。

さすが熱帯雨林と言うべきか

建物はほとんどが高床式で、

木造の民家が南北に

楕円形に広がっていて、

集落の周囲を木の柵が囲っている。

南北にある見張り台には

サーチライトが設置され、

NPCが1人ずつ、椅子に座ったり

水筒の中身を飲んだりと

あまり熱心とは言えない警備をしている。

他は民家が影になって

確認できないところも多いが、

確認できるだけで

10人の軽装備の歩兵がいる。

武装はMP5やMC51、HK33Eと様々だが、

共通しているのは

H&KのG3シリーズという事だろう。

『シヨウ、どんな感じだ?』

「ザツと12人。

見張り台2箇所 PSG-1と

G3SG/1持ちが1人ずつ。

民家の間を軽歩兵が10人。

武装はサブマシンガン、

アサルトライフル、バトルライフル。

LMGは見たところ無し。」

『どーすんの?』

突っ込んでいい?』

俺はマップを見て作戦を考える。

「まずカトラスがスモークチップで

南門に煙幕を。

そしたらトードは撃ちまくれ。

見張り台の2人は俺が倒すから

心配するな。

トードが弾幕で注意を引いてる間に

カトラスは突っ込んで遊撃戦。

俺はその援護。質問は?」

『はーい。』

昨日のシヨウ君のオカズはなんですかー?』
ハイ出ました下ネタ含むやつ。

みんなもこういうこと、あるよねえ?

こんな時にはコレ。

「麻婆豆腐だった。」

真面目に答える。

『チツ』

「カトラスは?」

『オレはー…』

「そうじゃない、質問は?」

『なーし』

ボケが2人だと本当に疲れる…

「よし、始めよう。」

『はーん』

無線を通じてカトラスの返事が

聞こえると同時に集落の正門前に

一本の矢が突き刺さり、

パンという音を立てて小さめの爆発を

起こして白色の煙を吐き出し始める。

集落の中に居たNPCたちが動き始め、

監視塔の敵NPCも煙の方向へ

ライフルを向ける。

俺は7・62mm仕様のアッパーレシーバーを

組み込んだLE—901—16sの

スコープを覗き込み、

監視塔のNPCにレクチエルを合わせて

引き金に指をかける。

スコープの中で緑色のサークルが生まれ、

俺の鼓動に合わせて動く。

「この距離なら偏差は考えなくて良いか…。」

次弾からの射撃に備えて

何人かのNPCに照準を合わせては

弾道を確認する。

「よし…トード、初めて良いぞ。」

カトラスはしばらく待機。」

『あいよ』『らじゃー!』

集落の中で防衛準備を整え始めた

NPCたちに赤いバレットラインとともに

大量の5・56×45mm NATO弾が

送り込まれる。

通りを横断していた数名が

全身を真っ赤に染めて爆散し、他にも数名の腕や肩に被弾エフェクトが煌めいた。

事前に指示した通りに

トードが十数発撃つごとに位置を変えるため、バレットラインを頼りに

撃ち返すNPCの弾丸は

一向にトードを捉えられない。

だが高い位置からだとも変わってくる。

監視塔の上の敵がジャングルで蠢くトードを発見したらしい。

ソイツの銃口からまっすぐトードへと

バレットラインが伸びていくが、

ソイツよりも先に俺が引き金を引いた。

敵NPCたちが生み出す大量の銃声に混じってシパアンツと

サプレッサーに抑制された銃声が鳴り、

監視塔の上のNPCが

膝から崩れ落ちる途中で爆散する。

続いて反対側の監視塔だ。

こっちは正門から離れているし、

トードは死角に入っているから

脅威度は低いが、

この後に突入するカトラスにとっては大きな障害になる。

俺はさつき照準を合わせた時の

バレットサークルを思い出し、

風や距離の影響を修正する。

あとは俺の鼓動に合わせるだけだ。

バレットラインが映らないように

引き金から指を離し、照準を合わせる。

呼吸を整えて引き金を引いた。
さつきと同じように

シパアンという銃声が鳴り、
NPCの心臓を貫いた。

撃たれた衝撃でNPCの体は

監視塔の柵を乗り越えて地面に落ちるが、

彼もさつきのNPC同様に

地面につく前に爆散した。

「監視塔はクリア。」

「トード、射撃中止。」

「カトラスは突入。」

返事が2つ返つてくると、

さつきまで喧しかった銃声が1つ減り、

それにつられるように

集落側からの射撃音も消える。

数秒の沈黙が流れ、

確認のためなのか、4名のNPCが

煙の消えない正門の方へ向かうが、

そのNPCたちの真ん中にカトラスが

煙を切り裂くかの如く飛び込んだ。

恐怖を感じていないNPCは

カトラスの方を振り向くが、

射線上には別のNPCがあるせいで

反応が遅れている。

カトラスは背中中のP90を構えると

AGI型のステータスに任せて

引き金を引きっぱなしで一回転。

360度に50発ばら撒いた。

NPC4体が一瞬で倒され、

カトラスの虐殺劇は加速する。

「建物の間や木箱をすり抜けて
敵に接近してはP90で穴だらけにして行く。
そして数分後、

集落の中には大量のドロップアイテムと
戦闘前から全く変化が見られない

カトラスだけが残った。

「カトラスは周辺警戒。

俺とトードは正門前で合流後に
中に入る。」

『はい』『あいよ』

俺もハーフギリを脱いで

ストレージに収納し、

メインのLE-901-16sのアッパーレシーバーを

5.56mm仕様に変更して移動を始める。

仮想世界なのに無駄にリアルな

ジャングルの草木を掻き分けて

正門前に到着した俺を

コーラ片手にトードが待ち構える。

「おせーよ。」

「悪い、予想以上に生い茂ってた。」

「この後は拠点防衛だろ?」

空っぽになったコーラの瓶を

投げ捨てながら聞いてくるトードに、

俺はメニュー画面からクエスト情報を

検索して調べる。

「そうだ。」

あと12人残ってる。」

「狙撃じゃ無いのか?」

良い質問だ。

俺も最初はそう思ったが、

俺はS Jの自衛隊チームの映像を

思い出し返して

その考えを改めた。

確かに防衛戦に於いて

狙撃手が居ると言うことは

かなり大きなアドバンテージとなるが、

それは攻撃側に”見られている”という

恐怖心を植え付けられるから

という要因がある。

だが今回の敵はNPCで、

GGOのフィールドに出現するNPCは

まだAIなどの感情を表現するシステムを

搭載していないため、

恐怖心を感じない。

むしろ狙撃に対して

冷静に対処してくる可能性だってある。

そして何より、

自衛隊チームが戦力を分散させたのは

個々が強く、

チームとしても連携が取れ、

狙撃手が優秀で、

メンバーが6人も居たからだ。

対する俺たちは3人。

これが正しい判断というわけではないが、

やめておいた方がいいだろう。

「火力が少ないんだ。」

これ以上戦力を分散させられるほど

俺たちはまだ強くない。」

「そか。」

まあそこらへんは任せる。」

「俺はトラップを仕掛けてくるから

その間にカトラスと装備のチェックを。」

「わかってる。」

集落を制圧してから十数分後。

自分のトラップ系スキルだけでなく、

自らのリアルの知識すらも最大限に発揮して集落の建物の間や遮蔽物の裏側、

門の周囲や建物の出入り口にトラップというトラップを仕掛けまくった俺は、

小雨から土砂降りに変わった雨に軽く舌打ちをした。

「…何も見えない。」

『だねー、こつちもなーんも見えん。』

俺の独り言にカトラスがわざわざ答えてくれたが、

よく考えればこの3人組で索敵スキルを最も上げているのはカトラスだ。

今のがカトラスのボケということに俺が気づく頃には、

もう一名に引火する。

『それは貴女の心が曇っているからです。』

どこぞの聖人の如く答えたトードにカトラスがかみつき、

いつも通りの口論に発展するが、

異常を察知したカトラスが先に口論を打ち切った。

『南から4人、北から4人。』

『やつと来たか。』

「よし、トラップにかかったら撃つていいぞ。」

俺は南側の窓に向かうと、

A C O Gサイトを覗き込んで雨の向こうに見える人影に照準を合わせた。

サイトの中の4人は躊躇せずに集落に入ると、

先頭を歩く人物が早速トラップを踏み抜いた。

ぼふつという音とともに雨で水浸しになった地面が揺れ、

敵兵のいるあたりの地面が持ち上がり、周囲に泥を撒き散らす。

濡れてぬかるんだ地面が爆発の威力を落としたらしい。

「チッ、1人だけか…。」

俺はスペック以下の爆発力に思わず舌打ちした。

最初に作動したトラップは60mm迫撃砲弾を応用した対人地雷で、

致死半径は最低10mはある。

爆発で舞い上がるはずだった土を泥に変えたせいで

迫撃砲弾の殺傷力が大幅に落ちている。

つまり、地面に埋めた地雷はアテにできない。

あとは建物や遮蔽物に仕掛けたブービートラップだけだ。

俺は窓ガラスをストックで叩き割ると

サプレッサーを外したLE-901-16sで牽制する。

たたん、たたん、と軽快な銃声を

響かせながらバレットラインがNPCたちの周囲の地面を抉っていく。

銃撃から逃れようと木箱の陰に2人のNPCが隠れたが、

残念ながらそこにあるのはダクトテープで貼り付けられたプラス

マグレネードだ。

俺は起爆装置代わりとしてプラズマグレネードにくっ付けた

C-4爆薬のリモコンのトリガーをカチツと引いた。

ビー玉サイズに千切ったC-4のバンツと弾ける音に続いて

目も眩むほどの光球が生まれ、木箱ごとNPCを消し飛ばした。

雨の中に生まれた青い閃光に俺は思わず目を逸らす、

『ひゃっほーっ！』

『汚物は消毒だっ!!』

無線機からは楽しそうな声が聞こえる。

この威力で2人しか倒せなかったのは少々物足りないが、

仲間は2人ともご満悦のようなのでとりあえずは良かった。

直後にバラバラっとXM8が火を噴いて北側の敵とトードが交戦を始めた。

俺は取り逃がした1人探してあたりを見回す。

生き残りは案外簡単に見つかり、

俺は迷いもせずにライフルの引き金を引いたが、NPCは死に際で根性を見せた。ビール瓶のようなものを俺の方に投げつけてくる。慌てて部屋の中に顔を引っ込めた俺の耳に、ぱりんつとガラスが割れる音が聞こえた。ハツと音源を見た俺が見つけたのは、NPCが投げしてきたビール瓶の破片とそこから波のように降りかかる炎だった。

「うわっ!?アッチいいいいッ!」
ストープに近づきすぎた時に感じる熱さをジリジリと全身に感じ、堪らず窓から飛び出した。

『お、汚物は消毒だ…。』
どこぞのカエルが俺を汚物扱いしているが、今はそんな場合じゃ無い。

服の上で燃える火を慌てて叩いて消した俺は、転がるように物陰に飛び込んだ。

ひと段落ついてライフルのマガジンを交換しようとしたが、マガジンを掴み損ねる。

手に違和感を覚えた俺は、視界の隅でデバフのアイコンが付いているのを見つける。素早さと器用さが下がっているようだ。

「トード、デバフが付いたーどうすればいい?」

一応VRゲーム初心者の俺はこういう時の対処法をトードに聞いてみるが、

『浄化結晶的なのは持って無えの?』

「何だそれ!」

『んじゃ、そのままだ。』

と、対処法がないらしい。

対処法がないのではどうしようも無いので、

俺はライフルを膝の上に乗せ、

ジリジリと違和感のある両手でマガジンを差し込んだ。

「やっぱ無理だ。トード、あとはそっちに任せる！」

『あー、だりー…』

このように、大変士気の低いSAWガンナーであるがゆえ、心配になった俺は

LE-901-16sを7.62mm仕様に換装するのももどかしく、

そのまま5.56mm仕様のLE-901-16sで伏せ撃ちの姿勢をとる。

水滴を拭ったACOGサイトの向こうで

トードが入っていた民家の扉が

どーんという音を立てそうな勢いで開くと、

そこからシュワちゃんが演じるターミネーターの如くトードが登場した。

が、ターミネーターなんぞ知るわけないNPCは怯む事なくバレットラインの雨を浴びせる。

レーザーサイトのようなバレットがトードに重なる直前、トードとNPCたちの間の地面に一本の矢が突き刺さった。

間をおかずに矢の先端から煙が噴き出し始め、瞬く間にNPCたちの視界を奪った。

一方のトードは両手に持ったXM8を構えると、それをブツ放す。

バラバラという銃声が2丁分、毎秒12発響かせ、合計200発を8秒で撃ち切った。

煙が晴れた南門にはNPCを倒した証拠であるドロップアイテムが4つ残っていた。

『はい、終了。お疲れ。』

勝手にしめて終わらせようとするトードにカトラスがお知らせする。

『また4人きたー』

『えー…、もうマジかよ…』

と言ってそこから先は無線機で拾えない小言を言いながら

トードはXM8から手を離した。
パシャツとぬかるんだ地面に落ちた自分の得物を一瞥すると、
ホルスターからバレルやフレームが紅く輝く巨大な、
拳銃と呼ぶことを躊躇うそれを抜いた。

『まあ試し撃ちでもするか。シヨウ、こいつつて1発撃てば死ぬ？』
「そりやそんなもんで撃たれたら死ぬだろうよ。」

俺にそう答えさせたその拳銃は

デザートイーグル・50AE 10インチバレルだ。

そしてトードのデザートイーグルは

俺がガンスミスのスキルを使って改造した銃でもある。

前回のクエストでXM8では戦闘ドローンの装甲を貫けなかった
事に

不満を抱いたトードがXM8のLMG仕様で

弾幕は張るのはやめたくないという葛藤の末、

セカンダリを強力なやつをするという結論が選り抜いた拳銃だ。

1丁目のバレルは鮮やかな紅で、

スライドはまるでシルクのようなホワイト。

グリップは水色だ。

もう1丁の方のバレルとフレームは1丁目と同じで、

スライドは鮮血を思わせるブラッディレッド、

グリップは派手に輝くゴールドだ。

2丁はトードによってスカーレット・シスターズと名付けられた。

バレルとフレームも一見塗装したように見えるが、

この色は素材が生み出している。

数週間前の話だが、

トードが1人でフィールドを探索している時に

ダンジョン的な怪しい研究所で見つけたらしい。

名前をスカーレットメタルというその金属を出された時は

『これをどうしろと…?』と思ったが、

まあなんとかなった。

強装弾でも耐えられるように、

スライド用のスカーレットメタルを強化しようと
グロッケングの鍛冶場に持って行ったら、

前述の悪趣味なブラッディレッドディのスカーレットメタルが返って
きた。

トードに聞いた話だと純度が高くなれば色が濃くなるとか。
そんなこんなで、

トードはデザートイーグル改めスカーレット・デビルと
Grip&Breakdownグを構えた。

最後に言っておく。俺に言わせれば変態である。
まったく…。

パーツの塗装をする俺の気持ちも考えてほしいものだ。

南門から入ってきた最後の4人が

バラバラに散らばってトードを囲み始める。

銃を構え、弓をつがえた俺とカトラスを無線機越しにトードがとめ
る。

『俺の獲物だ。邪魔するなよ?』

『はい出たー!独り占めはんたーい!職権乱用はんたーいっ!』

どこで職権を使ったのかとは敢えて突っ込まないが、

俺はデバフで全身が痺れているのでどっちにしる動けない。

カトラスはあーだこーだと文句を言うが、

グロッケンの酒場でカレーだのハンバーガーだのを

奢ってもらおうという事で結局は手出し無用となった。

だがそうやって喧嘩している間にも時間は過ぎていく。

NPCたちはトードを取り囲み、

まさに十字砲火を浴びせる構えだ。

NPCたちが各々のライフルをトードに向けると同時に

トードもスカーレット・シスターズを前方の2人に向け、

躊躇せず引き金を引いた。

ズカカンツと2発の銃声を響かせて撃たれたNPC2人が爆散し
た。

『いいねいいね!これだけでイツちまいそうだぜ!』

おそらく映像として記録したら

絶対にピー音で消されるだろうセリフを吐いたトードだが、

『えー、一部不適切な発言がありました。』

誠に申し訳ありません。』

一応は女子であるカトラスはそこから辺もしつかり見ていた。

『んだよ…キャンティ知らねえのかよ…』

ズカンズカン

『つたく…これだから最近の若い奴は…』

ズガンズガン

という感じで1発も撃たれずに4人を倒したわけだが、

決めゼリフがアレだとなんだか締まらない。

とにかくクエストをクリアした俺たちは、

集落で一番大きい建物に集まって

帰りの分の弾薬をストレージから取り出す。

俺がようやくデバフが消えた体を動かしていると、

3人の頭上でアナウンスの電子音が鳴り、

目の前のホロウインドウにメツセージが現れた。

「んー…なにになに…」

『武装勢力を撃退した事で集落が解放され、住人が戻ってきた。』

ガンシヨップ、アイテムシヨップ、酒場がオープンした。』だって。』

「まだ下にあるぞ。」

文章の最初だけ読んだカトラスに続いて今度は俺が読み上げる。

「えつと…」

『＜注意＞』

この集落はグロツケンから遠すぎる。

自分の身は自分で守らなければならない。

集落の中でも敵に気をつける。』

…つまりはフィールド扱いのミニミニグロツケンってことか？』

と、俺はトードに話を振るが、

トードはメニュー画面に何か打ち込んで数秒後にニヤニヤと笑みを浮かべる。

「おい、トード。今誰にメールしてた？」

「な、ナンノコトカナー…」

「棒読みの時点でワザとらしいんだよ！誰にメールした！」

俺はホルスターからHK45を抜いてトードの顎に当てる。

「…アルゴっていう情報屋…」

「そんでおいくら〜？」

後ろからいつもの幼児のような口調で

聞いてきたカトラスにトードはすんなりと答えた。

「150000クレジット…。」

「よし、3人で割れるね。」